

— 茨城県土浦市 —

中高津西原遺跡

—— 建壳分譲事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

2007

株式会社ランドホーム
土浦市教育委員会
中高津西原遺跡調査会

— 茨城県土浦市 —

なかたかづにしはら
中高津西原遺跡

—— 建壳分譲事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

2007

株式会社ランドホーム
土浦市教育委員会
中高津西原遺跡調査会



第2号住居跡



第1号溝跡ほか出土中世遺物

序

土浦市は霞ヶ浦や桜川の水に恵まれ、太古から人々が生活するのに適したところであり、貝塚、古墳、集落跡等数多くの遺跡が存在しております。

遺跡は当時の様子を知る手掛かりとなるだけでなく、現代の私達が豊かに生活するとのできる先人の偉業の一つでもあります。

このような貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えることは私達の大切な責務であり、郷土土浦発展のためにも重要なことと思います。

このたびの中高津西原遺跡の発掘調査は、市内中高津地区での株式会社ランドホームによる建売分譲事業に伴い実施されたものです。

今回の調査結果、遺跡内では古墳時代の竪穴住居跡が発見され、集落跡が形成されていたことが分かりました。これらの住居跡からは土器とともにまつりの道具である石製模造品やその素材が出土しました。

鎌倉時代になると溝に囲まれた空間に建物群が構築され、そこからは東海地方で焼かれた陶器や中国との貿易によってたらされた磁器なども出土しました。

本調査によって、市内中高津地区の古代文化の究明にいささかなりとも役立つことができますならば幸甚であります。

最後になりましたが、調査から報告書の刊行にあたり、関係各位の皆様のご協力とご支援に対し、心から厚く御礼申し上げます。

平成19年8月

土浦市教育委員会
教育長 富永 善文

例　言

1. 本書は、2006（平成18）年度に実施した土浦市中高津二丁目849-3所在の中高津西原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は事業者である株式会社ランドホームが計画する、建売分譲事業に伴う事前調査として実施したものである。
3. 中高津西原遺跡の確認調査は2006（平成18）年4月13～14日に比毛君男（教育委員会文化課）・関口　満（上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員）が担当した。発掘調査は2006（平成18）年9月5日から10月17日まで実施した。出土品の整理及び報告書の作成は2007（平成19）年4月9日より同年8月31日まで行なった。
4. 中高津西原遺跡の発掘調査は小川和博（（有）日研アート）が担当し、出土品の整理作業及び報告書の作成についても同様である。
5. 本書の原稿執筆は主に小川が行った。それぞれの担当については、各原稿の末に担当者名を明記した。本書の編集は小川・関口で行った。
6. 発掘調査、出土品整理作業及び報告書の作成については、次の諸氏、諸機関のご協力・ご教示を賜った。記して謝意を表したい。（敬称略）
茨城県教育委員会　茨城県県南教育事務所　有限会社宇田川建築設計事務所　株式会社ランドホーム　武藏野解説有限公司
7. 本書の写真は現場写真及び遺物写真を小川が担当した。
8. 本書に関わる記録図面・写真・出土品などは一括して上高津貝塚ふるさと歴史の広場に保管してある。なお、記録や遺物の整理・保管に際して、NNHの略称を付している。

中高津西原遺跡調査会組織

会長	須田直之	（土浦市文化財保護審議会長）〔平成18年度〕
	雨谷 昭	（土浦市文化財保護審議会長）〔平成19年度〕
副会長	長南幸雄	（土浦市教育委員会教育次長）〔平成18年度〕
	久保庭照雄	（土浦市教育委員会教育次長）〔平成19年度〕
理事	古谷満寿	（土浦市教育委員会参事兼文化課長）
理事	伊藤賢司	（土浦市都市整備部建築指導課長）〔平成18年度〕
	奥山政夫	（土浦市都市整備部建築指導課長）〔平成19年度〕
理事	大塚 博	（土浦市文化財保護審議会委員）
監事	堀越昭二	（土浦市博物館協議会委員）
監事	久松一夫	（土浦市教育委員会参事兼教育総務課長）〔平成18年度〕
	折本 茂	（土浦市教育委員会教育総務課長）〔平成19年度〕
事務局長	今泉登至	（上高津貝塚ふるさと歴史の広場館長）〔平成18年度〕
	市村秀雄	（上高津貝塚ふるさと歴史の広場館長）〔平成19年度〕
事務局員	石川 功	（上高津貝塚ふるさと歴史の広場係長）
	黒澤春彦	（上高津貝塚ふるさと歴史の広場係長）
	堀部 猛	（上高津貝塚ふるさと歴史の広場係長）

比毛君男 (土浦市教育委員会文化課主幹)

宇田寿美代 (上高津貝塚ふるさと歴史の広場主事)

事務局員兼出納員

関口 満 (上高津貝塚ふるさと歴史の広場係長)

○ 発掘・整理作業

調査主任 小川和博 ((有)日考古研茨城)

調査員 遠藤啓子 松林秀和

作業員 (発掘作業) 大久保敦子 小野 豊 佐賀 剛 佐賀 実 山下農二 露久保三郎 友部政夫

中村 薫 谷中 昌

(整理作業) 大瀬由紀子 大野美佳 小川知美

事務員 鈴木ひと美

凡 例

1. 本書では遺構の略称に以下の記号を使用した。

住居跡：SI 土坑：SK 溝状遺構：SD 不明遺構：SX

柱穴状遺構（ピット）：P 搅乱：K 旧石器時代調査区：PG

2. 遺構・遺物実測図中の表記は以下のとおりである。

（遺構）貼り床  遺物 ●

（遺物）繊維混入繩文土器  赤彩  黒色処理  施釉及び自然釉 

3. 本書中の色調に関する表現は新版標準土色帖（農林水産技術会議事務局監修2000年版）に従った。

4. 本書の遺構・遺物の記述は以下を原則としている。

1) 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北であり、標高は海拔高である。

2) 本書に掲載した遺構の縮尺に関しては以下の通りである。

調査区設定図：1／500 遺構配置図：1／250 住居跡：1／60 住居内炉跡：1／20

溝跡：1／60・1／250 土坑：1／50 柱穴状遺構・その他：1／80

3) 本書に掲載した遺物実測図の縮尺については1／3を基本としているが、旧石器時代出土遺物は2／3、石製模造品を（剥片含む）1／2とした。

4) 遺構の規模については、長軸と短軸を記しているが、基本的に長軸に対して直交する軸線の実数または推定値を記入した。なお両者を区分するため推定値については（ ）を付した。

5) 遺構の計測値で（ ）で表現されているものは残存値である。同様に、遺物観察表中の（ ）は残存値、〔 〕は復元値を表す。

6) 住居跡の規模は遺構上場の数値である。

目 次

巻頭写真（第2号住居跡、第1号溝跡ほか出土中世遺物）

序

例言・凡例

目次

第1章 経過	1
第1節 調査の経過	1
第2節 発掘作業の経過	7
第2章 遺跡の位置と環境	8
第1節 地理的環境	8
第2節 歴史的環境	8
第3章 調査の方法と成果	11
第1節 調査の方法	11
第2節 基本層序	12
第3節 旧石器時代	15
第4節 縄文時代	17
第5節 古墳時代	18
第6節 中世以降	31
1) 溝跡 (SD)	31
2) 土坑 (SK)	34
3) 不明遺構 (SX)	43
4) 柱穴状遺構群 (ピット群)	43
5) 遺構外出土遺物	56
第4章 総括	57
報告書抄録	
写真図版	

挿 図 目 次

第1図	開発エリア位置図	2
第2図	埋蔵文化財確認調査状況図	3
第3図	埋蔵文化財取り扱い状況図	5
第4図	周辺の遺跡位置図	9
第5図	調査区設定図	12
第6図	遺構配置図	13
第7図	旧石器時代調査区と出土遺物	16
第8図	遺構外出土の縄文時代遺物	17
第9図	第1号住居跡	19
第10図	第1号住居跡出土遺物	19
第11図	第2号住居跡・遺物出土状況(1)	21
第12図	第2号住居跡・遺物出土状況(2)	22
第13図	第2号住居跡炉跡	24
第14図	第2号住居跡出土遺物(1)	26
第15図	第2号住居跡出土遺物(2)	27
第16図	第3号住居跡・出土遺物	28
第17図	第4号住居跡	29
第18図	第4号住居跡出土遺物	29
第19図	第1号溝跡	32
第20図	第1号溝跡ほか出土遺物	33
第21図	第1~8号土坑	35
第22図	第9~15号土坑	38
第23図	第16~27号土坑	41
第24図	遺構配置図(1)〔1区〕	44
第25図	遺構配置図(2)〔1・2区〕	45
第26図	遺構配置図(3)〔2区〕	46
第27図	遺構配置図(4)〔2・3区〕	47
第28図	遺構配置図(5)〔3区〕	48
第29図	遺構配置図(6)〔3・4区〕	49
第30図	遺構配置図(7)〔4区〕	50
第31図	遺構配置図(8)〔5区〕	51
第32図	遺構配置図(9)〔6区〕	52
第33図	遺構配置図(10)〔7区〕	53
第34図	第2号住居跡の構造	61

写真図版目次

P L 1	遺跡近景、調査区全景
P L 2	旧石器時代試掘調査区(PG1)、旧石器時代遺物出土状況(PG3)、ナイフ形石器出土状況(1)・(2)
P L 3	第1号住居跡、第1号住居跡土層、第1号住居跡貯蔵穴
P L 4	第2号住居跡、第2号住居跡遺物出土状況、第2号住居跡貯蔵穴遺物出土状況
P L 5	第3号住居跡、第4号住居跡遺物出土状況、第4号住居跡土層
P L 6	第1号溝跡(1区)、第1号溝跡(3区)
P L 7	第1号溝跡(3区)硬化面、第1号溝跡(4区)、第1号溝跡(1区)土層
P L 8	第1号土坑、第2号土坑、第3号土坑、第4号土坑、第5号土坑、第6号土坑、第7号土坑、第8号土坑
P L 9	第9号土坑、第10号土坑、第11号土坑、第12号土坑、第13号土坑
P L 10	第14号土坑、第15号土坑、第16号土坑、第17号土坑、第18~20号土坑
P L 11	1区全景、2区全景、3区全景
P L 12	3区全景、4区全景、5区全景
P L 13	5区全景、6区全景、7区全景
P L 14	柱穴状遺構群(2区)、柱穴状遺構群(3区)、4区全景
P L 15	第2号住居跡出土遺物
P L 16	第2・4号住居跡出土遺物
P L 17	第2・3号住居跡出土遺物、旧石器時代・縄文時代出土遺物、第1号溝跡出土貝類
P L 18	第1号溝跡ほか出土遺物(1)・(2)

第1章 経過

第1節 調査の経過（第1～3図）

今回の調査は、株式会社ランドホームが中高津地内（第1図）で計画する建売分譲事業に伴うものである。その発端は、2006（平成18）年3月に事業者より土浦市教育委員会（以下市教委）に事業計画の提示とその事業予定地に存在する埋蔵文化財の取り扱いについて照会があった。このことを受け、市教委では遺跡地図との照合や現地踏査を行った。その結果、事業予定地は周知の遺跡である中高津西原遺跡にかかり、現状は荒蕪地となっており、遺物は申請地の全体で小片ではあるが採集することができた。

事業者に対しては事業予定地が中高津西原遺跡にかかるることを説明し、早い段階で埋蔵文化財の確認調査を行うことで合意した。そして、遺跡の取り扱いについては、確認調査の状況をもとに工事内容と照合し検討したい旨を事業者に伝えた。

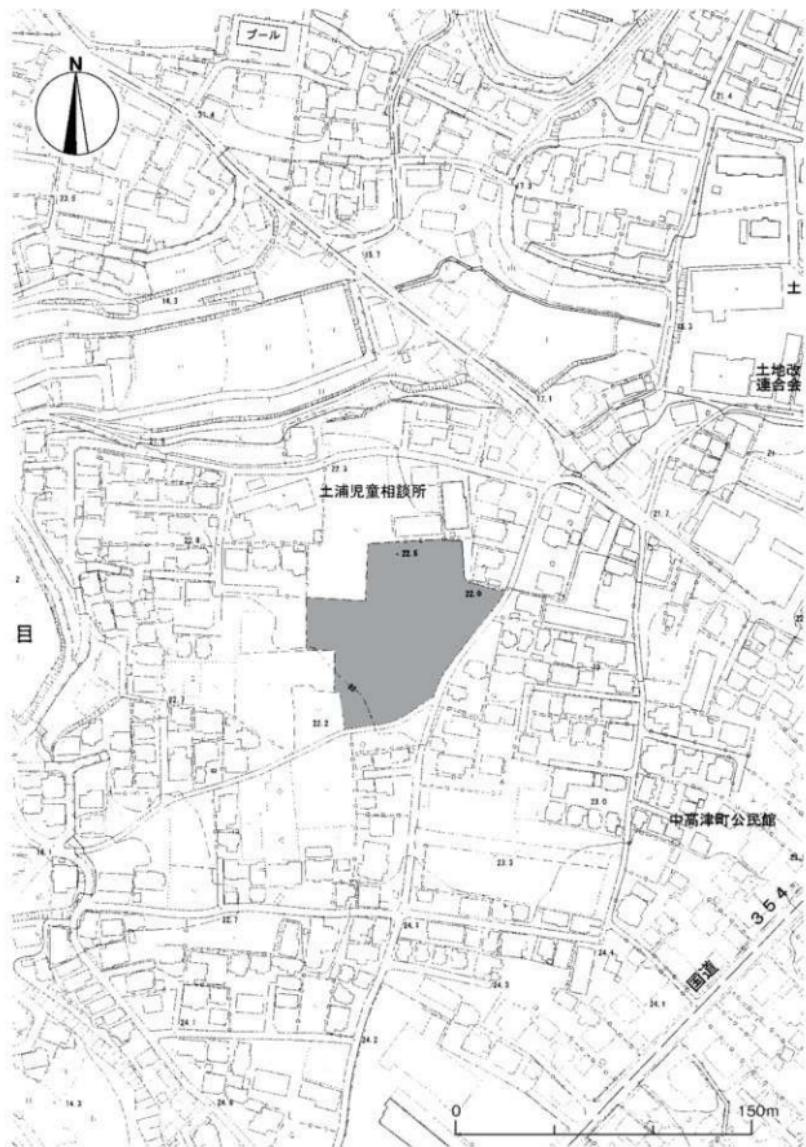
埋蔵文化財の確認調査は、2006（平成18）年4月13・14日に土浦市中高津二丁目849-3の約6,000m²の土地に9本のトレンチ（埋蔵文化財確認調査用溝）を設定して、重機を用いて行った（第2図）。確認調査トレンチは、事業予定地内におよそ等間隔で南北方向に設定した。その調査結果、トレンチから古墳時代の竪穴住居跡4軒や中世の溝跡・土坑・柱穴状遺構群が確認された。遺構の全体的な確認状況については、竪穴住居跡が事業予定地内の北部で検出されており、より北側に展開している様子が窺える。また、中世の遺構群については、溝跡が事業予定地内の中央部に弧を描いて東西方向に展開し、その北側のみに土坑や柱穴状遺構群が確認された。このような状況から、先の溝跡の南側については遺構などが確認されず、周知の遺跡範囲から除外することにした。この確認調査で出土した遺物は、竪穴住居跡から土師器片が出土し、溝跡や土坑などからは土師質土器片や常滑陶器片が少量出土した。特筆すべきは、溝跡の西端にシジミ貝小プロックが確認されたことである。

この調査結果については市教委が文書にて事業主に回答し、開発行為などによって遺跡の保存が図られない場合は発掘調査が必要となる旨を伝えた。

その後、事業者と市教委の間で埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ねた。その結果、事業地内の宅地予定部分については盛土を施し埋蔵文化財を保護し、道路予定部分については発掘調査を実施することで合意した。後に宅地部分の一部については地盤改良を実施する可能性が生じたため、発掘調査対象エリアに含めた（第3図）。発掘調査にかかる期間や費用については県積算基準に基づいて算出し、事業者に提示した。この発掘調査にかかる期間や費用については事業者で了承し、発掘調査に向け動き出すことになる。この中高津西原遺跡にかかる埋蔵文化財取り扱いの合意事項については、協定書として7月27日付けで締結した。

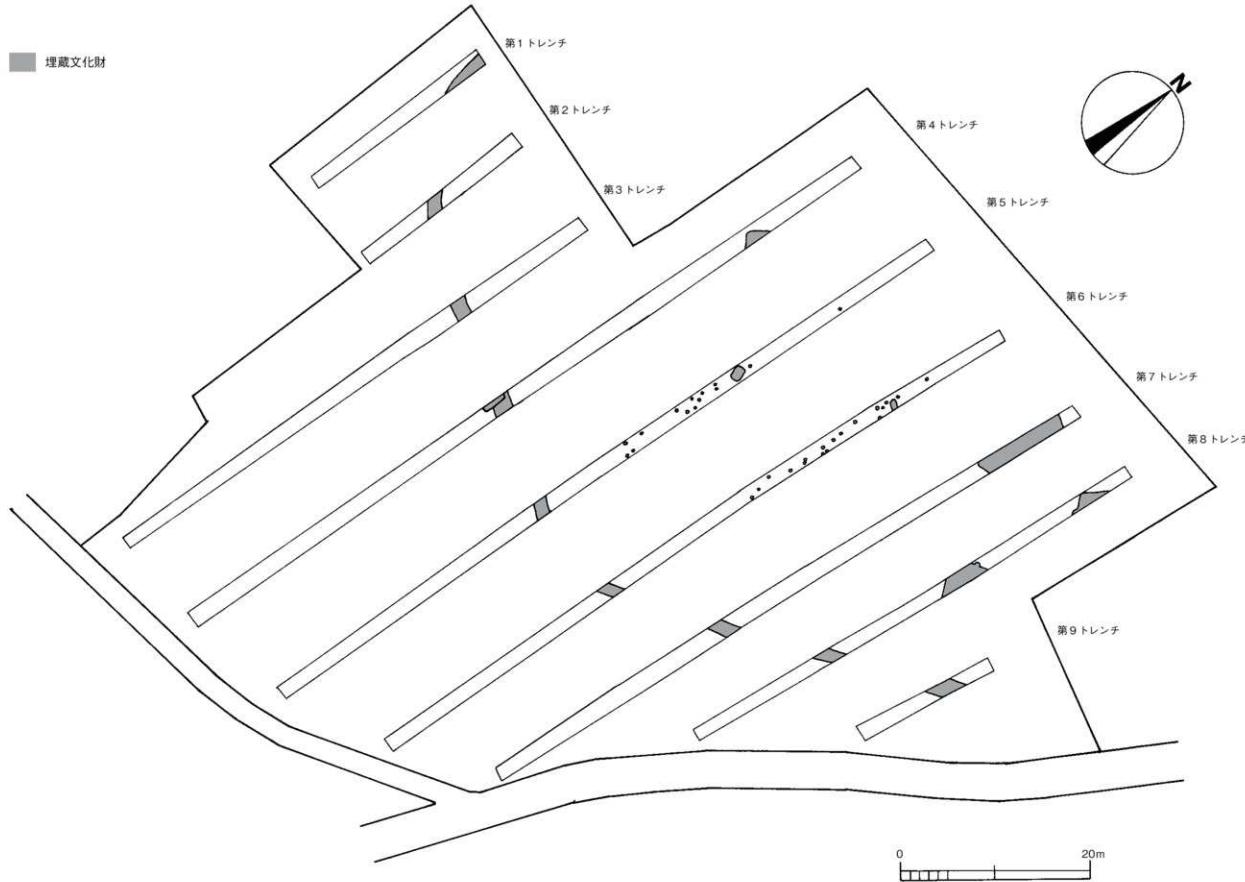
この中高津西原遺跡調査のための法的な手続き等については、文化財保護法第93条第1項の埋蔵文化財発掘の届出を5月28日付けで市教委から県教育長宛に進達した。その後、中高津西原遺跡調査会を組織し、同調査会から提出された法第92条第1項の埋蔵文化財発掘調査の届出を8月1日付けで市教委から県教育長宛に進達した。実際の発掘調査は8月23日付けで事業者と同調査会との間で委託契約書を締結し、9月5日から発掘調査を開始した。この発掘調査は10月17日まで行い、10月23日付けで市教委が県教育長宛に発掘調査の終了確認依頼を進達した。

今回の申請地は株式会社ランドホームにより造成工事が実施された後、同申請地全体が一建設株式会社に

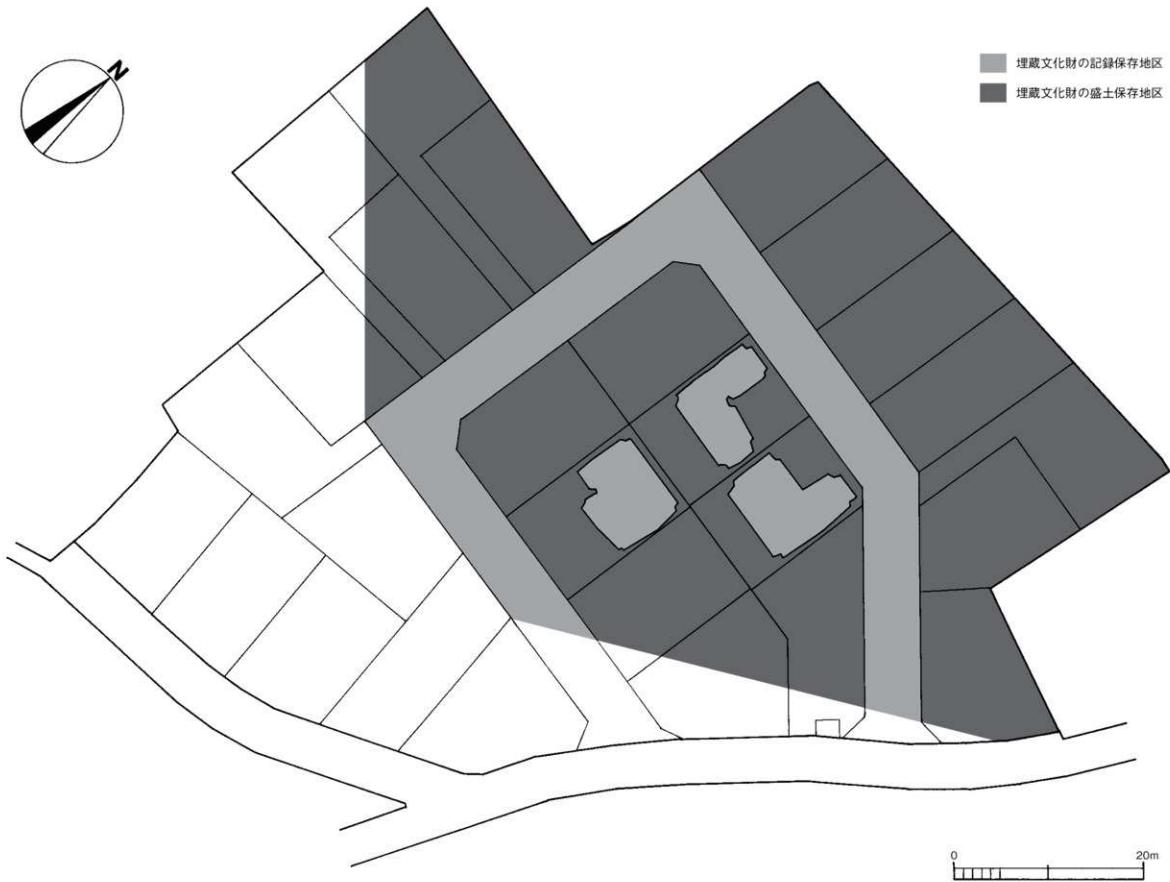


第1図 開発エリア位置図

■ 埋蔵文化財



第2図 埋蔵文化財確認調査状況図



第3図 埋蔵文化財取り扱い状況図

売却され、区画された土地に建売住宅が建設されることになった。そして、一建設株式会社により提出された各区画の文化財保護法第93条第1項の埋蔵文化財発掘の届出を、市教委が県教育長宛て通達した。これらの建売住宅建設工事に対する対応は、工事箇所が埋蔵文化財の盛土保存エリアであり工事による影響が埋蔵文化財に及ばないことから慎重工事で対応した。

(関口 满)

第2節 発掘作業の経過

2006（平成18）年

8月29日 本日より重機による表土除去を行い、1区～3区まで終了。

30日 表土除去を本日で終了する。住居跡、土坑、柱穴状遺構群、溝跡を確認する。

9月5日 遺構確認開始、1区～3区は完了する。

6日 4区・7区における遺構確認の継続。

7日 5区・6区の遺構確認を終了する。遺構調査を開始する。第2号住居跡に土層ベルトを設定し、覆土除去を行う。焼失家屋で5世紀代の住居跡と判明。

8日 第2号住居跡の土層ベルトを除き、床面、壁面、壁溝を検出する。第1号住居跡の床面、壁面を検出する。第3号住居跡の床面、壁面を検出中に有孔円板1点が覆土中より出土。1区の第1号溝跡の上層ベルトを除き底面まで検出。

9日 第1号住居跡の土層図実測、写真撮影、貯藏穴調査。第2号住居跡土層ベルトを除き、床面精査、写真撮影。第3号住居跡土層写真撮影。3区の第1号溝跡の覆土中に硬化面を検出する。

12日 第1号住居跡の貯藏穴土層図実測。第2号住居跡土層図実測。

15日 第1号住居跡の貯藏穴を完掘。第2号住居跡の土層ベルト除去。第1～5号土坑の土層図実測、写真撮影。第2～5号土坑の平面図実測。調査区5区・6区の柱穴状遺構、土坑調査。

20日 1区の第1号溝跡・第1号住居跡の全景写真撮影。第2号住居跡の平面図作成。2区柱穴状遺構群の調査。

21日 第2号住居跡の炭化物除去、貯藏穴調査。

22日 第2号住居跡の完掘写真撮影。3区・4区の第1号溝跡土層図実測。

26日 第2号住居跡全景写真。7区の土坑調査。第7～10号土坑調査。

28日 5～7区内の清掃を行い写真撮影、全測図作成。

29日 5区の全測図作成。調査区全面清掃。

10月3日 1区全測図、第1号住居跡の全測図。旧石器時代の調査。第2号住居跡全面清掃。

4日 旧石器時代確認調査区PG2の調査。

11日 3区清掃。旧石器時代確認調査区PG2の調査完了。

12日 第2号住居跡の掘り方調査。4区全面清掃。

13日 第1・3号住居跡の掘り方調査完了。

17日 本日にてすべての調査を終了する。

(小川和博)

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境（第4図）

土浦市は茨城県南地域のほぼ中央部に位置し、平成の大合併で2006（平成18）年2月に旧新治郡新治村と合併し人口約14万3千人を数え、その面積は約123km²となっている。周辺市町村としては、市域の北方に石岡市、北東方向にかすみがうら市、西方につくば市、南方に牛久市・稲敷郡阿見町が存在する。市域の地理的特徴として、北部には筑波山塊の山並みとそこから南東に伸びる新治台地、中央部には古鬼怒川によって形成され現在は桜川が流れる桜川低地、東部には霞ヶ浦（土浦入り）、南部には筑波・稲敷台地が存在する。

今回発掘調査が実施された中高津西原遺跡は市内中高津二丁目地内に所在し、桜川南岸の標高25m前後を測る筑波・稲敷台地上に立地する。当遺跡が立地する台地は、北側と西側が桜川低地から入り込む谷津によつて開析が進み舌状台地を形成する。今回の調査地はその台地の縁辺からはやや奥まっている。この舌状台地の西側の谷津を挟んだ対岸には龍善寺遺跡が所在する。

当遺跡の現況はそのほとんどが畠や耕作のなされていない荒蕪地であり、その周辺には個人住宅や集合住宅が建ち宅地化が進行している。遺跡近隣には、北側に茨城県立土浦児童相談所があり、東側には旧水戸街道である国道354号線が南北に走っている。

中高津西原遺跡の立地する筑波・新治台地の地質は、手野層を基盤とし、その上層には成田層下部・成田層上部・竜ヶ崎砂礫層・常総粘土層・関東ローム層と続く。遺跡地内では旧石器時代の遺物・遺構検出及びローム層等観察のための深掘り調査を実施したところ、関東ローム層が約2mの厚みを持って確認された。

（関口 満）

第2節 歴史的環境（第4図）

以下は、中高津西原遺跡の周辺に確認されている遺跡について、発掘調査などが実施されたものを中心にお取り上げ、周辺地域の歴史的な環境を時代順に概観してみたいと思う。

まず旧石器時代について、関東ローム層中の石器集中区などが確認された遺跡はないが、うぐいす平遺跡（4）、寄居遺跡（5）、永国遺跡（17）等でナイフ形石器や石刃などが出土している。

縄文時代については、早期から前期の遺物が寄居遺跡（5）で確認されているが、あまり目立った存在ではない。市内では中期になると規模の大きな遺跡が見られるようになる。この時期の遺跡として、本遺跡の西方には近年調査された龍善寺遺跡（2）が存在し、周辺には六十原遺跡（29）や六十原A遺跡（30）、和台遺跡（15）があり、特に群在する土坑を作り集落遺跡が目立つ。この他、貝塚として明治時代から知られる上高津貝塚（9）や小松貝塚（31）が存在し、いずれも後・晩期のものである。上高津貝塚は1977（昭和52）年に国指定史跡となり、現在は上高津貝塚ふるさと歴史の広場として史跡整備されている。

弥生時代の遺構・遺物が検出された遺跡として、うぐいす平遺跡（4）があり、弥生時代後期の竪穴住居跡が3軒確認され、この内の1軒から銅鏡が出土している。この他、永国遺跡（17）や和台遺跡（15）でも竪穴住居跡が確認されている。

古墳時代の遺跡のあり方は特徴的で、古墳群や古墳からなる墓域と竪穴住居跡からなる集落域が明確なか



第4図 周辺の遺跡位置図

周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	時代					No.	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世
1	中高津西原遺跡				○	○	○	18	阿ら地遺跡			○		○	
2	龍神寺遺跡	○		○				19	才ノ内遺跡	○		○			
3	下高津小学校遺跡				○	○		20	いさりき遺跡			○	○		
4	ういす平遺跡	○		○	○	○		21	谷祖遺跡	○		○	○		
5	吉原遺跡	○		○	○	○	○	22	内出長遺跡	○	○	○	○	○	○
6	高井城址						○	23	南古見敷田跡						○
7	天王山古墳群				○			24	氣出遺跡			○	○	○	
8	華下女飼古墳					○		25	神出遺跡	○		○	○	○	
9	上高津貝塚	○		○	○			26	中沼遺跡				○	○	
10	湖辺津遺跡	○			○	○		27	霞ヶ岡遺跡	○		○	○	○	○
11	宮崎B遺跡	○				○		28	所谷遺跡			○			
12	上高津八幡遺跡				○		○	29	六十原遺跡			○			
13	上高津新町遺跡	○				○	○	30	六十原A遺跡	○	○				
14	鬼子遺跡				○	○		31	小松貝塚			○			
15	和田遺跡	○	○	○	○			32	高津川神山古墳群						○
16	水田御吳遺跡	○		○				33	土浦城跡						
17	永国遺跡	○	○	○	○	○									

たちで存在する。古墳群として天王山古墳群（7※現在は湮滅）、高津天神山古墳群（32）などがあり、古墳として幕下女騎古墳（8）などがある。市内では前期から中期の古墳は少なく後期から終末期の古墳が目立つ。古墳時代の集落跡については多く確認されており、龍善寺遺跡（2）、うぐいす平遺跡（4）、寄居遺跡（5）、永国遺跡（17）、神出遺跡（25）、阿ら地遺跡（18）、いさろ遺跡（20）などがある。寄居遺跡やうぐいす平遺跡では前期の堅穴住居跡がまとまって確認されている。龍善寺遺跡では前期から後期の堅穴住居跡が確認され、神出遺跡、阿ら地遺跡、永国遺跡などでは中期から後期の堅穴住居跡が確認されている。

奈良・平安時代については、諏訪窪遺跡（10）うぐいす平遺跡（4）、寄居遺跡（5）、谷畠遺跡（21）、永国遺跡（17）などがある。うぐいす平遺跡では、奈良時代の堅穴住居跡がまとまって調査された。

中世の遺構・遺物が確認された遺跡については、寄居遺跡（5）、諏訪窪遺跡（10）、宮脇B遺跡（11）、内出後遺跡（22）、東出遺跡（24）、神出遺跡（25）、中居遺跡（26）、霞ヶ岡遺跡（27）などがある。神出遺跡では地下式礎、土坑、方形堅穴遺構などがまとまって検出され、台地を成形している様子も窺える。宮脇B遺跡では大型の溝跡が検出され橋脚状の柱穴跡が存在する。東出遺跡や神出遺跡、そして諏訪窪遺跡では火葬施設跡が確認されている。これらの遺跡の多くからは土師質土器の内耳鍋などが出土しており15世紀から16世紀頃のものと考えられる。

そして、周辺には中世城郭と考えられる遺跡として高井城址（6）、南古屋敷館跡（23）が存在する。高井城址は大部分が湮滅したため遺構の存在は不明であるが、南北朝時代に築かれた高井城跡といわれている。同所の字名には現在でも古館の名が残っている。南古屋敷館跡は花室川に面した小さく突き出た台地先端に位置しており、現在でも土塁や堀が確認されている。

また、近世城郭として桜川低地には土浦城跡が存在し、多くは市街化しているものの本丸・二の丸等の中核部分は亀城公園として市民の憩いの場となり県指定史跡となっている。

参考文献

- 1983 日本窯業史研究所『茨城県土浦市 永国遺跡』
- 1991 茨城県教育委員会『茨城県 遺跡・古墳発掘調査報告書VI（昭和62～平成元年度）』
- 1994（財）茨城県教育財團『寄居遺跡・うぐいす平遺跡』茨城県教育財團文化財調査報告書第84集
- 1994 土浦市教育委員会『国指定史跡 上高津貝塚A地点』
- 1995 コロナ社『茨城県 地学のガイド』地学のガイドシリーズ3
- 1996 土浦市教育委員会『六十原A遺跡』
- 1997 上高津貝塚ふるさと歴史の広場「土浦市 上高津貝塚ふるさと歴史の広場年報 第3号』
- 1999 土浦市教育委員会『東出・神出・中居遺跡』
- 2001 茨城県教育委員会『茨城県遺跡地図』
- 2001 土浦市教育委員会『いさろ遺跡』
- 2002（財）茨城県教育財團『谷畠遺跡』茨城県教育財團文化財調査報告書第194集
- 2002 土浦市教育委員会『永国遺跡（第2次調査）』
- 2002 土浦市教育委員会『阿ら地遺跡』
- 2003 土浦市教育委員会『六十原遺跡』
- 2006 土浦市教育委員会『龍善寺遺跡』
- 2007 土浦市教育委員会『諏訪窪遺跡』

（関口 満）

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法（第5・6図）

中高津西原遺跡の本調査は、平成18年9月5日から同年10月17日まで実施した。確認調査の結果に基づき、開発区域のうち、道路予定地及び土壤改良計画のある建物建築予定地3棟部分の合計920m²を調査対象とした。道路幅の調査区域は幅約6.5mのちょうど幅広いトレンチ調査の様相を呈し、道路予定地の約3／4に相当する範囲が対象となった。また、道路上に開まれたエリアの建物3棟分の土地を発掘することとなった。調査区域の呼称は、道路予定地の北東側を1区とし、北側を2区、西側を3区、南側を4区とした。また建物予定地3棟分については北西側を5区、北東側を6区、南側を7区と呼称する。

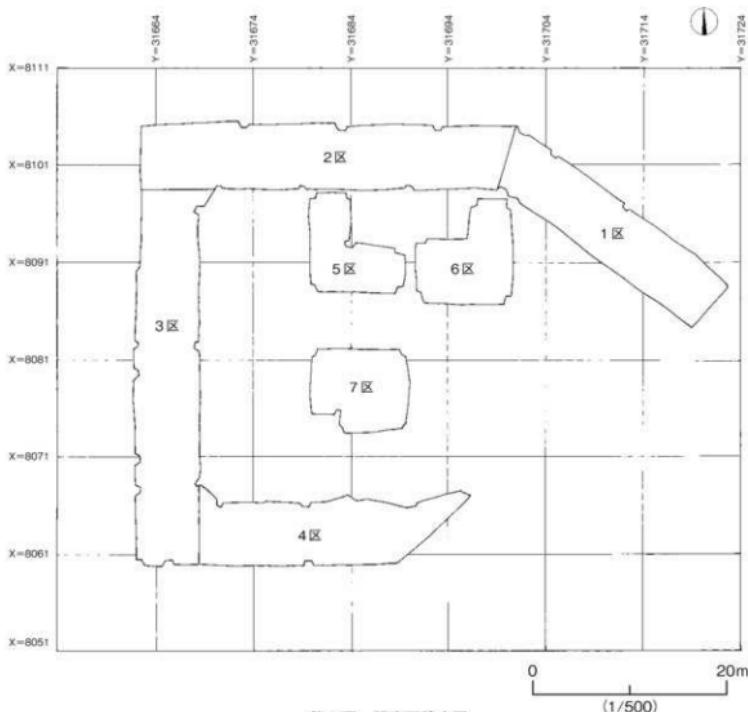
調査は重機による表土除去から開始し、遺構確認のための精査を人力により行う。すでに確認調査の段階で把握されていた住居跡3軒および溝跡である黒色土の落ち込み部を再確認し、これを中心に丁寧な精査を繰り返した。さらに土坑および柱穴状遺構の落ち込みが確認され、最終的に竪穴住居跡4軒を検出した。しかし、道路幅の調査のためいずれも部分調査となり、とくに住居跡SI01・03・04の3軒は遺構の大半が未調査区域に広がっており、限定的な情報が得られたに過ぎない。なお、住居跡SI02は調査区北西隅の2区で確認されたものであったが、北側および南側が未調査区域に延びている以外ほぼ全形の確認が可能であった。一辺7.3mの方形を呈し、古墳時代中期の火災住居跡であった。また、住居北東側から滑石の剥片、碎片が10箇所まとまって出土していたことから、工房跡である可能性が考えられた。さらに確認調査の段階で北東隅および南西隅で明らかになっていた溝跡は、全掘はできなかったものの南側で一部が確認でき、確実に繋がっていることが判明した。構築時期は中世の12～13世紀と推定される。この他に土坑および柱穴状の遺構が確認されている。覆土は黒色土のものが多く、切り合い関係がほとんどない。これらの遺構には先の溝跡と類似する覆土を持つものがあるが、遺構に伴う遺物がほとんど見られないことから、帰属時期を中世以降とした。

また南側の4区東から貝岩製のナイフ形石器が出土した。そのため一部を深掘りしたが単独出土であった。さらに西側3区で遺構密度の薄い調査区域に旧石器時代文化層確認のため2m×2mの調査区を2ヶ所設定し深掘り調査を実施する。明確な旧石器時代文化層を検出できず、基本層序のみの観察となった。

発掘調査の結果、住居跡4軒、中世と推定される溝跡1条、中世以降の土坑26基および柱穴状遺構437基を検出し調査を完了する。

なお、調査区の設定にあたっては、国家座標を基準とし、調査区中央の建物建築予定地7区北端の位置にX軸=8,081m、Y軸=31,684mの基準点（GG1）を設定し、北側40m、西側20m、南側20mに基本杭を設定した。さらに補助杭として3本追加して調査区内に10ヶ所の基本杭を設け、これらの杭を基に遺構及び出土遺物の測量を行なった。また調査区内に水準杭を3ヶ所設置した。

（小川和博）



第5図 調査区設定図

第2節 基本層序（第7図）

今回の調査では、旧石器時代の遺物を検出するためエリア内の3ヶ所の調査区（PGI・2・3）で深掘り調査を実施した。その中で得られた層序の所見を基本層序とする。

表土層下の遺構確認面であるローム層上面までは4層に分層されるが、第1～3層は最近の耕作土である。しかし第4層の暗褐色土は比較的古い層と捉えられ、確認できる範囲は限定されており、層厚は30cm前後で直接第5層の黄橙色硬質ローム層に達してしまう。ここではいわゆるソフトローム層はまったく検出できず、すでに削平されているものと判断した。しかし第4層は最近の耕作土と比較して締りがあることから、中世段階の整地層ではないかと推定している。そのためローム層を大規模に削平し、立川ローム層のVI層に相当する第5層が遺構確認面となったものと思われる。この第5層の層厚は最大で35cmを測り、堅緻で締まりのあるローム層である。明確ではないが始良・丹沢降下火山灰（AT）が含まれる層に比定してよいであろう。第6層は上下層に比較して暗く、立川ローム層第2黒色帯に対比される層と判断した。層厚は15～25cm前後でかなり硬く粘性に富む。第7層以下は堅緻で締まりがあり、全体的に粘性にともと硬質ロームである。なお第9層のにぶい黄褐色硬質ローム層は全体的に暗く武藏野ローム暗色帯に相当するものと思われる。また調査区内最下層の第11層は常緑粘土層に相当するもので、灰白色を呈する。



第6図 遺構配置図

第3節 旧石器時代

今回の調査で、旧石器時代の遺物として頁岩製のナイフ形石器が1点、南側調査区の4区東端で検出された。そのためこのナイフ形石器出土地点を中心に調査区（PG3）を設け深掘り調査を実施した。さらに調査エリア西側の3区においても2m×2mの調査区（PG1・PG2）を2ヶ所設定し、旧石器時代に係る文化層を確認するための深掘り調査を実施したが、同時代の遺物・遺構は確認できなかった。

1) PG3区の調査（第7図 P L 2）

調査区南側4区の東寄りで遺構確認のため第4層暗褐色土を除去し、本調査区の地山層である第5層上面を精査していた段階でナイフ形石器1点が検出された。少なくとも出土層位は第5層上面として問題はないが、その上位層でもあるソフトローム層などの明確なローム層が確認できず、正確な層位は把握困難であった。このナイフ形石器の出土位置をより明確にするため、周辺の深掘り調査を実施した。これがPG3区と呼称した旧石器時代確認調査区ある。調査区の設定段階で搅乱の激しい東側への調査を断念し、西側を中心と調査区を設定した。南北2m、東西2mを基本とし、さらに南西側50cm四方の拡張区を設け鉤状とした。深掘りは第2黒色帶に相当する第6層下部から第7層まで掘りすすめたものの、剥片、碎片等の出土による旧石器時代の生活痕跡を確認することができず、したがってナイフ形石器の単独出土と判断した。

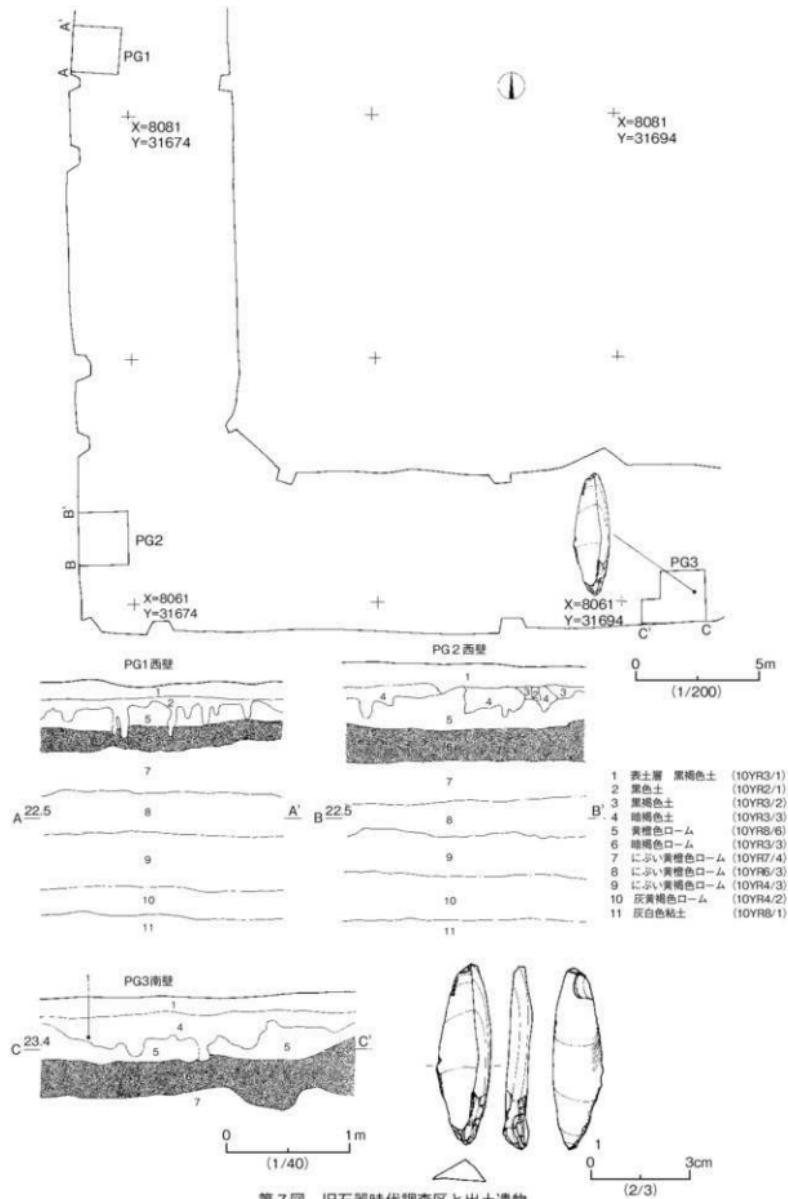
2) ナイフ形石器（第7図 P L 17）

頁岩製で完存する基部調整のナイフ形石器である。縦長剥片（石刃）を素材とする。素材の打面は切断し、打面側を先端とする。右側の基部側を中心に調整加工を施し、わずかに左側基部にも調整加工がみられる。また刃部左側先端部付近にもわずかな調整痕が窺える。なお調整加工の及んでいない鋭利な右縁辺には刃こぼれがみられ、中央横断面は三角形を呈する。大きさは長さ5.79cm、最大幅1.594cm、最大厚0.86cm、重量5.54gを測る。

（小川和博）

旧石器時代出土遺物

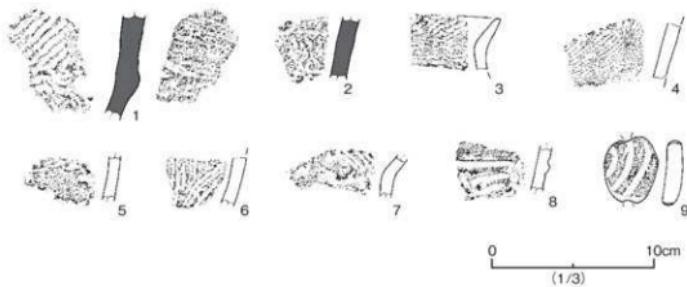
掉図番号	種別	計測値				石質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第7図1	ナイフ形石器	5.79	1.594	0.86	5.54	頁岩	



第7図 旧石器時代調査区と出土遺物

第4節 繩文時代（第8図 PL17）

本遺跡から縄文土器の小破片が出土している。出土位置は古墳時代の住居跡覆土内および表採資料である。1は深鉢の胴部破片。断面三角形の隆帯により区画され、地文に無節Lを施文する。内面に条痕文が施され、胎土に多量の纖維を含む。2は内面の条痕文は確認できないが、施文や胎土が1と同一であり、同じ時期と推定され、早期終末に位置付けられる。3は口縁部がくの字状に外反する前期末葉の土器である。口縁部は単節LR、頸部は結節縄文が施文されている。4は深鉢の胴部破片。無節Lが施文されている。5は横位の結節縄文がみられる。6・7は前期後半の平行沈線文土器である。8は隆帯に沿って有節沈線文が施文される中期・阿玉台Ib式に比定される。9は中期・加曾利E I式土器の土器片錐である。胴部破片を利用しており、楕円形に周縁研磨が施され、長軸方向に紐掛け溝を刻む。大きさは長さ3.82cm、幅3.24cm、厚さ1.106cm、重量15.34gを測る。



第8図 遺構外出土の縄文時代遺物

第5節 古墳時代

古墳時代の遺構としては調査エリアの北側を中心に竪穴住居跡が4軒確認されている。調査エリアが不規則なせいもあり、遺構の全体像が理解できるものは少ない。これらの住居跡からは古墳時代中期の遺物が主体的に出土している。

第1号住居跡（SI01）（第9・10図 P L 3）

調査区の北東側1区に位置する。確認調査の段階ですでに把握されていたもので、確認調査トレントが本住居跡の西側に掛かっていた。しかし、道路建設のため住居跡の2／3以上は北側の未調査区域に延びており、住居南側のみが調査可能となった。なお、少なくとも南壁辺は確実に把握でき、規模については推定可能である。まず、遺構確認面での標高は23.40mである。規模は南壁辺長4.25m、確認された東壁辺長（2.10）m、同じく西壁辺長（1.30）mを測り、平面形はほぼ方形を呈するものと推定される。貯蔵穴の位置が住居南側で、炉跡は北西側に設置されているものと推定すると主軸方位はN-47°-Wを示し、西側に傾いている。床面は3cm前後の比高差はあるものの起伏はなくほぼ平坦で、ローム粒・ロームブロックを混入した明黄褐色土および黄褐色土を7～10cm前後の厚さに敷きつめ、貼床にしていた。貼床は、検出部のほぼ全面硬化面が確認できる。壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は26.0～31.0cmを測る。壁溝は東壁辺および南壁辺で構築しているものの、南西隅および西壁辺では確認できない。規模は上面幅で18.0～25.0cm、深さ2.0～6.0cmの横断面U字状を呈する。炉跡は確認できなかった。また柱穴も明瞭ではない。住居西側に未調査区域に広がる径（55.0）cm、深さ45.0cmの二段掘りで円形を呈する柱穴状の掘り込みがみられるが、土層観察では貯蔵穴の覆土に酷似している。さらに東側に対峙する掘り込みがないことから柱穴と判断するにはさらに未調査区域の調査を持つしかないであろう。

一方明確な貯蔵穴が住居跡南東隅に設置されている。平面形は南北にやや長い楕円形を呈し、規模は径58.0×75.0cm、深さ65.0cmを測る。北側に二段の掘り込みがみられ、西・東壁はほぼ直線的に外傾して立ち上がる。底面は平坦であるが、硬化していない。覆土は7層に分層可能で、自然堆積層である。

また西側床面上に30×60cmの範囲に焼土の塊が検出された。炭化材等火災住居を示す痕跡がないことから、いわゆる棄てられた焼土であろう。

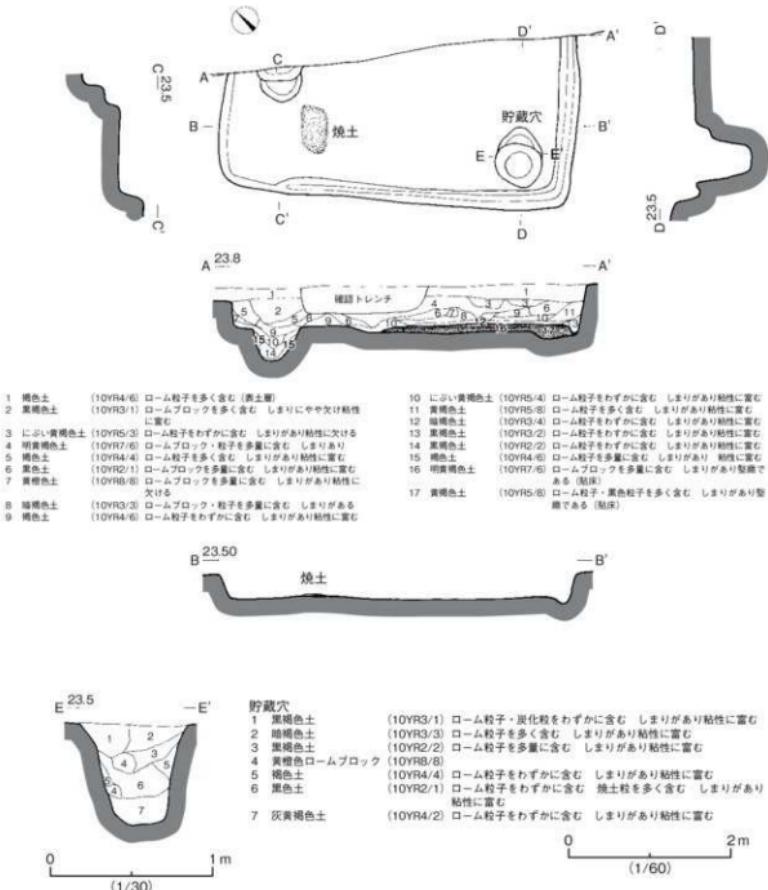
住居掘り方は、特に深掘りした箇所ではなく全体的に深さ7～10cm前後にわたり無造作に掘削し、そこにローム粒・黒色粒子を多く含む黄褐色土（10YR5/8）を基底として叩き、さらにロームブロックを多量に含む明黄褐色土（10YR7/6）を叩き貼床としていた。

また住居跡覆土は第1～9層まではロームブロック・ローム粒子を多く含む埋め戻し土層で、床面上まで達し、わずかに床面上および柱穴状の掘り込み内の第10～15層が自然堆積の状態を示していた。

本跡から遺物として土師器が出土している。実測遺物は壺の底部破片1点のみである。出土地点は覆土中である。

出土遺物 第10図1は壺の底部破片。底径6.0cmを測る。外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ整形。胎土に石英・長石粒を含み、焼成は良好である。

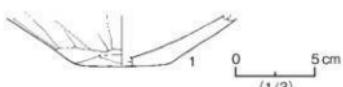
なお、本跡の時期は、出土遺物が土師器壺底部1点であるが、古墳時代中期（5世紀代）と推定される。



第9図 第1号住居跡

第1号住居跡

辨別番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考
第10回1	土師器	甕	-	(3.1)	(6.0)	石英・長石	褐色 7.5YR4/3	良好	外側ハケズリ、内側ハラテ	東部1/2残存



第10図 第1号住居跡出土遺物

第2号住居跡（SI02）（第11～15図 P L 4・15・16）

調査区の北西隅2区西寄りに位置する。本跡も確認調査の段階ですでに把握されていたものである。なお本跡は北隅および南隅がそれぞれ未調査区域に広がっており完掘はできなかったものの、全体の形態把握には大きな影響はない。

まず確認面において立地する標高は23.73～23.80mと東側が若干高くなっている。規模は南北軸長7.20m、東西軸長7.26mを測り、平面形はほぼ正方形を呈する。炉跡が住居中央西寄りに位置しており、この炉軸線を主軸とする方位はN-60°～Wを示し、西側に傾いている。床面は南側が8cm前後高く北高差はあるものの起伏はなくほぼ平坦で、ローム粒を混入した黄橙色土を5～12cm前後の厚さに敷きつめ、貼床にていた。床面の硬化部は、炉跡周辺から住居の中央部が顯著であったが、ほぼ全面で確認できる。壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は26.0～29.0cmを測る。壁溝は未調査区域である北コーナーおよび南コーナー部分を除き全辺で確認でき、全周しているものと推定される。規模は上面幅で20.0～32.0m、深さ8.0～15.0mの横断面U字状を呈する。柱穴は主柱穴4本と支柱穴4本、梯子穴と推定される1本の計9本が検出されたが、主柱穴P1～P4はいずれも深度が深く直線的で間尺の合った明瞭な配列構造を持ち、ちょうど住居の対角線上に位置する。さらに支柱穴P5～P8は検出された各コーナーに配置される。また梯子穴P9は東壁際断の中央に位置する。まず主柱穴として炉跡の西側に穿ってあるP1は径38.0×42.0cmの円形で、深さ92.5cm。北方P2は径36.0×43.0cmの円形で、深さ93.0cm。東方P3は径29.0×32.0cmの円形で、深さ94.0cm。南方のP4は径30.0×37.0cmの円形で、深さ100.5cmを測る。つぎに支柱穴P5は西端に穿ってあり、径27.0×35.0cmの楕円形で、深さ9.5cm。東隅P6は径24.0×26.0cmの円形で、深さ18.7cm。南端のP7とP8は重複しており抜き取り穴と推定される。P7は径25.0×40.0cmの楕円形で、深さ20.5cm。P8は径35.0×38.0cmの楕円形で、深さ23.0cm。東壁際の梯子穴P9は径23.0×29.0cmの楕円形で、深さ8.0cmを測る。また本跡の特徴として間仕切溝が5本検出されている。まず西壁には北側と南側の2本が構築されている。北側は壁溝から直角に延びるのではなく、外側に向かって主柱穴P2方向に掘削されている。長さ109.5cm、幅23.0cm、深さ11.0cmを測る。また南側はやはり壁溝から斜めに掘られ、途中角度を直角に変え主柱穴P1と連結する。延べ長さ113.0cm、幅32.0cm、深さ9.0cm。北壁では東側から直角に設けてあり、長さ158.0cm、幅16.0cm、深さ7.0cm。さらに東壁では中央南側で炉跡に方向と一致し、長さ171.0cm、幅19.0cm、深さ11.0cm。また南壁では西寄りにやはり直角方向に掘削されており、長さ141.0cm、幅20.0cm、深さ13.0cmを測る。

炉跡は住居中央西側で、主柱穴P1とP2の中間に設置され長軸110.0cmを測る大型の炉であった。しかし、調査の段階で切り合い関係が確認され、新旧二基の存在が判明したが、時間的な差は余りなかったようみられる。いずれも遺存状況は良好である。炉跡1は東側である中央寄りに位置し、西端部が炉跡2によつて切られている。規模は長軸40.0cm、短軸31.0cm、深さ5.5cmの楕円形を呈し、住居主軸方向に長軸を持つ。掘り方は浅い皿状に掘り窪め、底面は起伏がなく平坦で被熱による赤化硬化している。また新規炉跡2は西側である外方に造り替えられ、3倍の広さを有する。規模は長軸70.0cm、短軸53.0cm、深さ7.0cmの楕円形を呈し、やはり住居主軸方向に長軸を持つ。掘り方は浅い皿状に掘り窪め、底面は起伏がなく平坦で被熱による赤化硬化がみられる。

貯蔵穴は三基設置されている。西壁辺に接して2基が炉跡を挟むように並列している。南側の貯蔵穴Iの規模は長軸69.0cm、短軸66.0cm、深さ77.0cmの円形を呈し、覆土中に高壙・壙・壺・甕の計5点の土師器が検出された。北側の貯蔵穴2の規模は長軸83.0cm、短軸73.0cm、深さ57.0cmの方形を呈し、覆土中に土師器

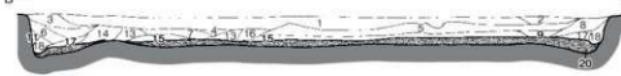


A 24.0



A'

B 24.0

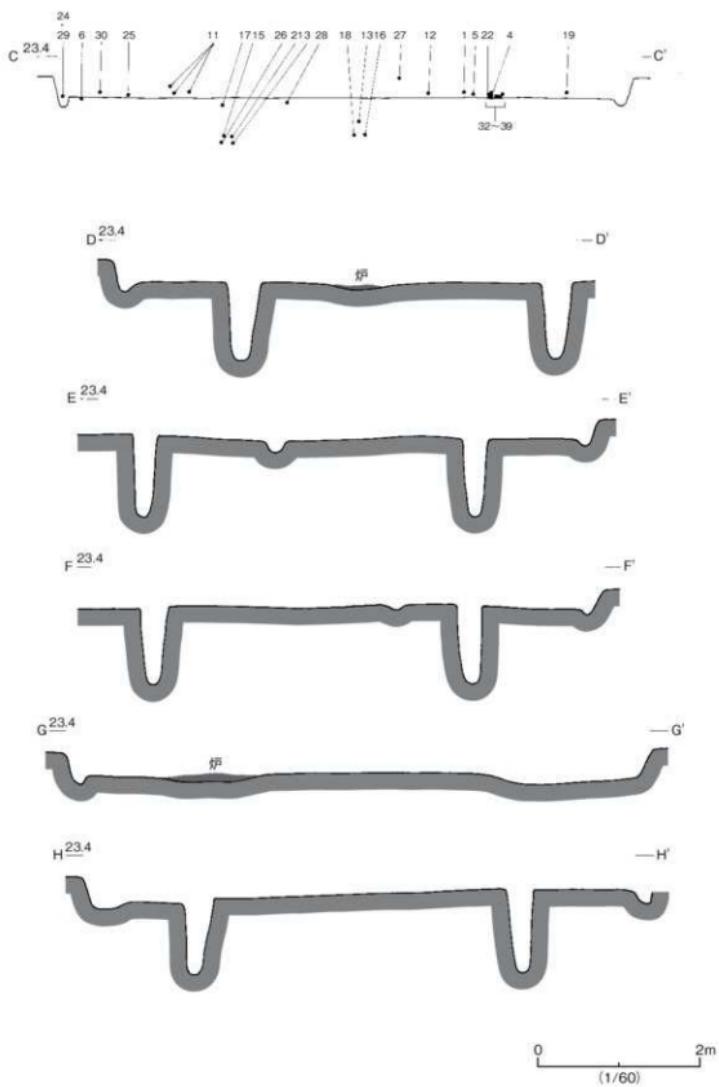


B'

- | | | | |
|-----------|---|---------------|---------------------------------------|
| 1 黒色土 | (10YR2/1) ローム粒子をわずかに含む 漬化粒を多く含む しまりがあり粘性に富む | 11 灰青褐色土 | (10YR4/2) ローム粒子を多く含む しまりがあり粘性に富む |
| 2 淡青褐色土 | (10YR6/4) ローム粒子を多く含む しまりがあり粘性に富む | 12 に少し灰青褐色土 | (10YR5/4) ローム粒子を多く含む しまりがあり粘性に富む |
| 3 黒褐色土 | (10YR3/1) ローム粒子を多く含む しまりがあり粘性に富む | 13 黒褐色土 | (10YR3/2) ローム粒子を多く含む しまりがあり粘性に富む |
| 4 黒褐色土 | (10YR3/2) ローム粒子・漂化粒を多く含む しまりがあり粘性に富む | 14 黒褐色土 | (10YR1.7) 漬化物を多量に含む しまりにやや欠け粘性に欠ける |
| 5 明青褐色土 | (10YR6/6) ローム粒子・ブロックを多量に含む しまりがあり粘性に富む | 15 黑褐色土 | (10YR4/4) ローム粒子・漂化粒子を多く含む しまりがあり粘性に富む |
| 6 黑褐色土 | (10YR2/2) ローム粒子・漂化粒子を多く含む しまりがあり粘性に富む | 16 暗褐色土 | (10YR3/4) ローム粒子をわずかに含む しまりがあり粘性に富む |
| 7 に少し黄褐色土 | (10YR7/4) ローム粒子を多く含む しまりがあり粘性に富む | 17 に少し黄褐色土 | (10YR7/4) ローム粒子を多く含む しまりがあり粘性に富む |
| 8 黑褐色土 | (10YR2/1) 漂化粒子を多量に含む しまりがある | 18 黑褐色土 | (10YR3/2) ローム粒子を多く含む しまりがあり粘性に富む |
| 9 黄褐色土 | (10YR5/8) ローム粒子・ブロックを多量に含む しまりがあり粘性に富む | 19 黄褐色ロームブロック | (10YR8/8) しまりがあり 粘性に欠ける |
| 10 明青褐色土 | (10YR6/6) ロームブロックを多量に含む しまりがあり粘性に富む | 20 黄褐色土 | (10YR8/6) ローム粒子を多く含む しまりがあり堅硬である (點線) |

0 2m
(1/60)

第11図 第2号住居跡・遺物出土状況 (1)



第12図 第2号住居跡・遺物出土状況（2）

高坏が計3点検出された。南コーナーの貯蔵穴3は半分以上が未調査区域に広がっており正確な規模は不明である。しかし、確認された規模は長軸(65.0)cm、短軸(40.0)cm、深さ23.0cmの方形を呈し、覆土中に滑石碎片がわずか1点出土したのみであるが工作用ビットと推定される。

なお、床面上には特に住居西側に集中して炭化材が検出された。柱材など明瞭な部材は確認できないが、屋根材の一部が火災により崩落したものであろう。しかし、床面は被熱による赤化現象はみられない。

住居掘り方は、全体的に深掘りした箇所ではなく深さ3~11cm前後にわたり掘削しており、特に住居中央部の3~5cm程度に対し、壁際周縁部は10cmとやや深く掘削している状況が観察される。そこにローム粒を多く含む黄橙色土で叩き貼床としていた。

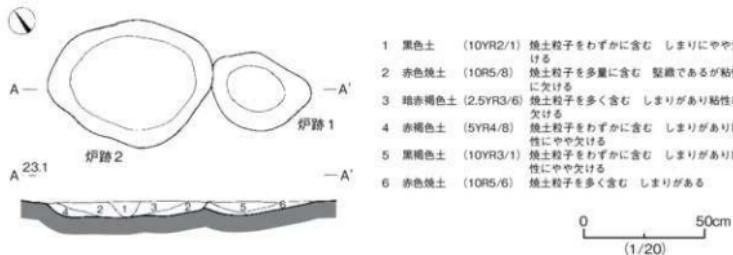
また住居跡覆土上層は第1層の黒色土で覆われ、レンズ状を呈する自然堆積の状態を示しているものの、中層以下はローム粒子、ロームブロックを包含する埋め戻し土層となっており、下層である床面上は炭化材の堆積によりより複雑な土層を示している。住居覆土は19層に分層でき、床面である第20層は貼床部である。

本跡から遺物として土師器と土製品である土玉および石製模造品の製作にともなう滑石の剥片、碎片が出土しており、分布状況は第11・12図に示したとおり、床面上と貯蔵穴内から検出されている。まず土師器は高坏、坏、壺、甕などで、大半は西側貯蔵穴二基からまとまって出土し、土玉は逆にばらついていた。また滑石の剥片、碎片は住居東コーナー付近に集中して出土しており、明らかに作業場であったことを示唆している。また南コーナー貯蔵穴内にも滑石の碎片が検出されたことで、貯蔵穴1・2とは異なる工作用ビットと考えられる。

まず貯蔵穴1の覆土中から坏1点、高坏2点、壺1点、甕1点の合計5点が纏まって出土し、また貯蔵穴2の覆土中からは高坏3点が出土している。その他は住居内周縁の壁際にばらつきながら検出されている。大半は床面上から出土したもので、覆土中で検出されるものは破片であり、かなり限定されていた。また第14図1の坏や同図11の高坏はほぼ完存に近い土師器であるが床面に置かれた状態で出土している。土製品である土玉は3点出土した。なかでも炉跡内で検出された同図28は径2cmほどの小型の土玉であるが、3方向から穿孔されている珍しいもので、単に漁網鍾用としての使用例は疑問視されるものである。

こうした一般住居跡で出土する遺物以外に、住居跡東コーナー付近で石製模造品の素材と思われる滑石製の剥片が纏まって出土していた。1~2cm前後の剥片と5mm以下の碎片である。しかし、ここでは石製模造品の出土はなかった。

出土遺物 第14図1~5は坏である。1・2は平底の底部をもち、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部端部は内削状を呈しわざかに外反する。3は全面赤彩が施された優品である。小さな平底の底部から体部は外傾し、口縁部は垂直気味に立ち上がる。4は平底の底部から体部は内湾する。5は小型の鉢形を呈する。やや上げ底気味の底部から体部は内湾気味に立ち上がる。6~8は壺である。6は完存品で平底の底部から体部は球形を呈し、口縁部はくの字状に外傾して立ち上がる。外面の整形は比較的粗い。7は口縁部、8は底部破片であるが、整形は丁寧に施されている。9・10は甕である。10は平底で、体部は内湾して立ち上がり、口縁部は短く外反する。11~20は高坏である。11以外にほぼ完存に近いものではなく、坏部と脚部のみ破片である。11は坏部下端に明瞭な棱をもち、体部は内湾気味に外傾して立ち上がり、脚部はハの字状に大きく開く。12・13は坏部破片である。12は下端に明瞭な棱を有し、体部は大きく開き、口縁部端部でさらに外反する。13も下端で棱をもつ。体部は内湾気味に外傾して立ち上がる。これらはいずれも内外面をヨコナデした後、粗い放射状のミガキを施す。15~20は脚部破片である。15・16は内部成形がハケ目調整で施されている。18を除きいずれも赤彩が施されている。また16の据部には溝状擦痕がみられ、転用砥石として使用さ



第13図 第2号住居跡炉跡

れていた。第15図21・22は壺の破片である。21は複合口縁を呈し、部体は内済しながら立ち上がり、口縁部は緩く外反する。22の底部は突出し、肥厚する。23～27は壺であるが、25・27は壺の底部の可能性がある。24は部体が球形を呈し、口縁部は強く外反する。頸部付近が極端に肥厚する。

第15図28～31は土製品である。28は長さ2.12cm、径が2.15cm、重量8.62gの小型の土玉である。ほぼ球形を呈し、3方向から穿孔されている。上下、左右二方向であるが、団上下および左右方向は貫通するものの、正面から裏側は未貫通で途中において中止している。29・30は径4cm近いや大型品である。ほぼ球形を呈し整形は丁寧である。29の大きさは長さ3.78cm、径3.85cm、重量49.66g。30は長さ3.25cm、径3.52cm、重量29.42gを測る。31は管状土鍾である。欠損品で長さ3.82cm、径2.22cm、重量8.68gである。

第15図32～39は滑石製の剥片である。定形したものはない。固化していないが5mm以下の碎片も5点出土している。形状はばらつき重量は1～3gであるが、大半は1.5g前後である。また研磨痕の残るものはない。

なお本跡の時期は、出土遺物である土師器からは古墳時代中期（5世紀代）に比定される。

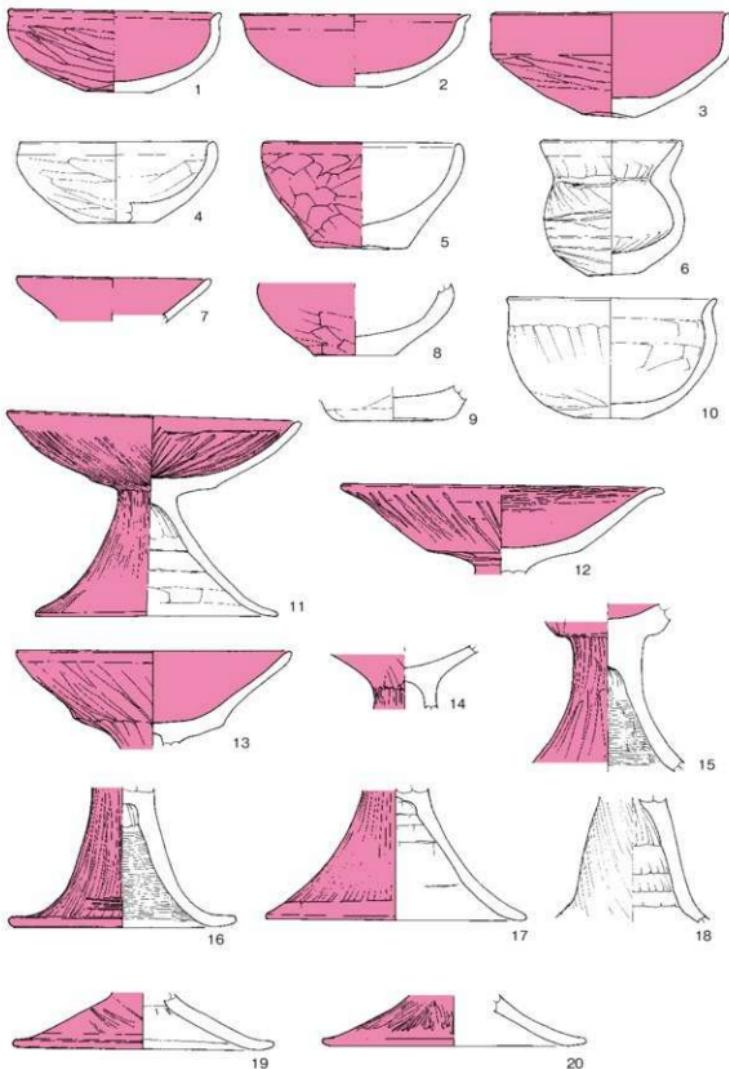
第2号住居跡

辨別番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考
第14回1	土師器	壺	[132]	5.00	4.2	チャート・石英・長石	浅黄褐色 10YR8/4	良好	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ナダ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	本邦、口縁部1/2、底部残存。
2	土師器	壺	[142]	4.50	[4.0]	チャート・石英・長石	明赤褐色 5YR5/6	良好	外面ヨコナデ、ヘラナデ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	本邦、口縁部1/4、底部1/2残存。
3	土師器	壺	148	6.5	2.9	黒色粒子・石英・長石	赤色 7.5R4/6	良好	外面ヘラナデ。内面ヘラナデ。	本邦、口縁一部欠損。
4	土師器	壺	[120]	5.0	[4.6]	黒色粒子・石英・長石	深黒褐色 10YR3/2	良好	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	口縁部1/6、底部1/4残存。
5	土師器	壺	[120]	6.5	6.0	石英・長石	黒褐色 10YR2/2	良好	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	本邦、口縁部1/4、底部残存。
6	土師器	壺	[88]	8.3	3.2	黒色粒子・石英・長石	暗褐色 7.5YR3/3	良好	口縁部外面ナダ、体部外面ヘラケズリ、ミガキ。口縁部内面ナダ、体部内面ナダ。	口縁部1/3欠損。
7	土師器	壺	[120]	[2.6]	-	スコリア・石英・長石	赤褐色 10YR4/6	良好	外面ヨコナデ、ヘラナデ。内面ヘラナデ。	本邦、口縁部1/4残存。
8	土師器	壺	-	(4.4)	[4.6]	チャート・石英・長石	にせい黄褐色 10YR5/3	良好	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	本邦、底部1/2残存。
9	土師器	壺	-	(2.0)	[7.0]	チャート・石英・長石	褐色 7.5YR4/3	良好	外面ヘラケズリ。ヘラナデ。内面ヘラナデ。	成都1/4残存。

辨団番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考
10	土師器	碗	[130]	7.4	[4.2]	黒色粒子・石英・長石	にい・赤褐色 2.5YR4/3	良好	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ミガキ。	口縁部1/3、底底部1/2残存
11	土師器	高环	182	126	[15.0]	黒色粒子・スコリア・石英・長石	褐色 7.5YR6/6 黒褐色 5YR3/1	良好	外面环部ヨコナデ、ヘラナデ、脚部ヘラナデ。内面環部ヨコナデ、脚部ヨコナデ、ヘラケズリ。	本筋、口縁部大崩壊、底部崩壊、脚部2/3欠損
12	土師器	高环	[200]	[5.4]	-	石英・長石	明赤褐色 5YR5/6	良好	外面ヨコナデ、ヘラナデ、ミガキ。ヘラケズリ、内面ヨコナデ、ヘラナデ、ミガキ。	赤筋、口縁部1/4残存
13	土師器	高环	17.0	(6.0)	-	チャート・石英・長石	褐色 7.5YR7/6	良好	外面ヨコナデ、ヘラナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	赤筋、环部3/4残存
14	土師器	高环	-	(3.7)	-	黒色粒子・石英・長石	にい・褐色 7.5YR6/4	良好	外面ヨコナデ、ヘラナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	赤筋、环部崩壊、脚部破片
15	土師器	高环	-	(10.2)	-	黒色粒子・石英・長石	にい・褐色 7.5YR5/4	良好	外面ヨコナデ、ヘラナデ、内面ハケズリ、ヘラナデ。ハケ目、ヘラナデ。	赤筋、脚部崩壊、底部大崩壊
16	土師器	高环	-	(8.6)	[14.0]	チャート・黑色粒子・石英・長石	褐色 7.5YR7/6	良好	外面ヨコナデ、内面ヨコナデ、ハケ目、ヘラケズリ。	赤筋、环部崩壊、脚部大崩壊1/3残存
17	土師器	高环	-	(8.0)	[16.0]	石英・長石	にい・黄褐色 10YR7/3	良好	外面ヨコナデ、内面ヨコナデ、ヘラケズリ。	赤筋、脚部1/3残存
18	土師器	高环	-	(7.7)	-	黒色粒子・石英・長石	にい・黄褐色 10YR7/4	良好	外面ヨコナデ、内面ヘラナデ。	脚部残存
19	土師器	高环	-	(3.5)	[16.0]	チャート・石英・長石	にい・褐色 7.5YR7/4	良好	外面ヨコナデ、ヘラケズリ、ヘラナデ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	本筋、脚部1/2残存
20	土師器	高环	-	(3.2)	[16.4]	石英・長石	にい・黄褐色 10YR8/4	良好	外面ヨコナデ、ヘラケズリ、ヘラナデ。内面ヘラナデ。	本筋、脚部1/4残存
第15回21	土師器	盤	168	(6.4)	-	チャート・石英・長石	赤褐色 25YR4/6	良好	外面ヨコナデ、ミガキ。内面ヘラナデ、ミガキ。	環付着、口縁部残存
22	土師器	盤	-	(2.7)	7.5	黒色粒子・雲母・チャート・石英・長石	黒褐色 25YR3/2	良好	外面ヨコナデ、ヘラケズリ、ヘラナデ。内面ヘラナデ。	底部残存
23	土師器	盤	[190]	(3.2)	-	黒色粒子・石英・長石	灰褐色 10YR4/2	良好	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ。	口縁部1/8残存
24	土師器	盤	175	(17.7)	-	チャート・石英・長石	褐色 7.5YR4/3	良好	口縁部内外ヨコナデ、底部・全体内ヘラケズリ。全体内ヘラナデ、ヘラケズリ。	環付着、口縁部崩壊、脚部1/6残存
25	土師器	盤	-	(4.8)	7.6	黒色粒子・雲母・チャート・石英・長石	にい・黄褐色 10YR8/4	良好	外面ヨコナデ、内面ヘラナデ。	底部残存
26	土師器	盤	-	(10.4)	5.5	石英・長石	にい・褐色 7.5YR5/4	良好	外面ヨコナデ、内面ヘラナデ。	底部残存
27	土師器	盤	-	(5.7)	7.4	黒色粒子・石英・長石	灰褐色 7.5YR4/2	良好	外面ヨコナデ、内面ヘラナデ。	環付着、底部残存

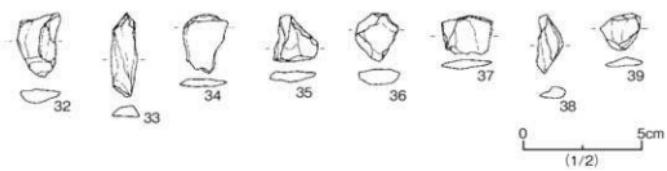
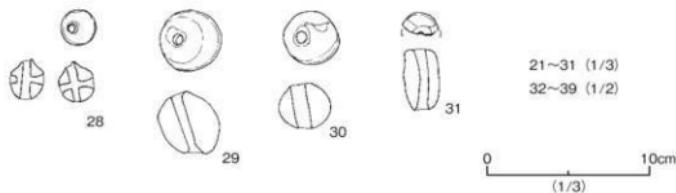
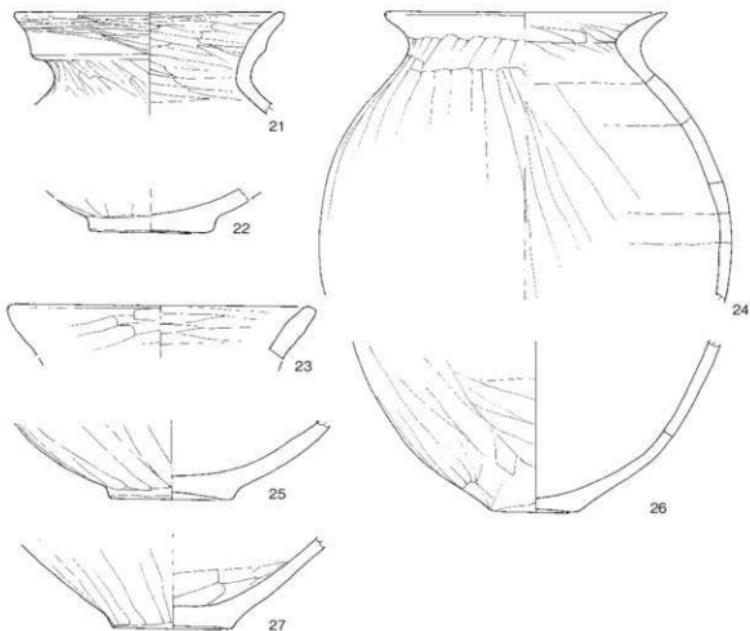
辨団番号	種別	計測値				出土地点	備考
		径 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)		
第15回28	土玉	2.15	2.55	0.745	862	室内	完存品
29	土玉	3.78	3.85	0.993	49.66	群溝内	完存品
30	土玉	3.25	2.82	0.870	29.42	床面直上	完存品
31	管状土器	2.22	3.82	(0.710)	(8.68)	屋上	1/2残存

辨団番号	種別	計測値				石質	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第15回32	調片	2.535	1.619	0.366	3.04	滑石	
33	調片	3.409	0.954	0.438	1.82	滑石	
34	調片	2.266	1.017	0.311	1.24	滑石	
35	調片	1.934	1.754	0.413	1.50	滑石	
36	調片	1.939	1.685	0.705	2.42	滑石	
37	調片	2.42	1.809	0.259	1.14	滑石	
38	調片	1.432	1.667	0.323	0.98	滑石	
39	調片	1.582	2.043	0.228	1.12	滑石	



0 10cm
(1/3)

第14図 第2号住居跡出土遺物 (1)



第15図 第2号住居跡出土遺物 (2)

第3号住居跡 (SI03) (第16図 P L 5・17)

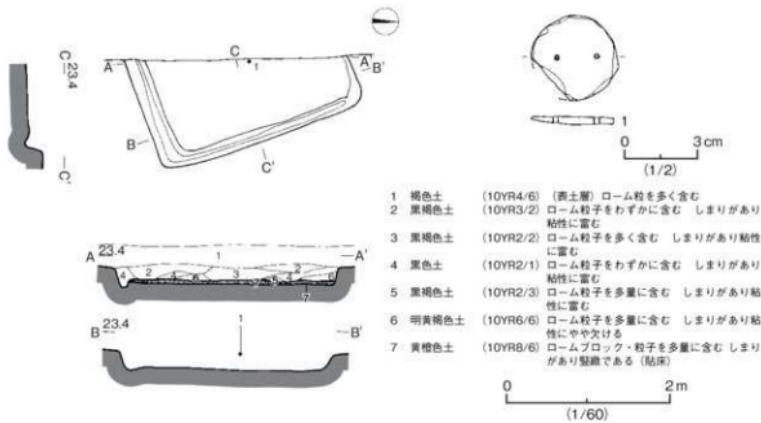
調査区の北西側3区北で第2号住居跡の南西5mに位置する。なお、住居跡の約2/3は西側の未調査区城に延びており、住居東側のみが調査可能となった。しかし少なくとも東壁辺は確実に把握でき、規模については推定可能である。まず確認面の標高は23.28mである。規模は東壁辺長2.63m、確認された北壁辺長(0.64)m、南壁辺長(1.44)mを測り、平面形はほぼ方形を呈するものと推定される。検出されていない炉跡が北側に設置されているものと推定すると主軸方位はN-20°-Wを示し、西側に傾いている。床面は4cm前後の比高差はあるものの起伏はなくほぼ平坦で、ローム粒・ロームブロックを混入した黄褐色土を4~6cm前後の厚さに敷きつめ、貼床していた。貼床は、検出部のはば全面硬化面が確認できるが、壁周辺はやや軟質であった。壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は19.0~23.0cmを測る。壁溝は東壁辺および南壁辺で構築されているものの、北壁辺では確認できない。規模は上面幅で16.0~24.0cm、深さ3.0~4.0cmの横断面U字状を呈する。炉跡および柱穴は確認できなかった。柱穴を含めた炉跡や貯藏穴の構築についてはさらに未調査区域の調査を待つしかないであろう。

住居跡の掘り方は特に深掘りした箇所ではなく全体的に深さ4~6cm前後にわたり無造作に掘削し、そこにロームブロック・ローム粒を多量に含む黄褐色土(10YR8/6)を叩き貼床としていた。また住居跡覆土は第1~6層まで確認されたが、いずれも自然堆積の状態を示している。

本跡から遺物として石製模造品である双孔円板が1点、覆土中から出土している。その他の遺物は皆無で、時期決定できる土師器の出土はない。

出土遺物 第16図1は滑石製の双孔円板である。一部を欠損している。ほぼ円形を呈し、表裏面の研磨痕は明瞭ではないが、側縁の面取り研磨は比較的よく残されており、丁寧な仕上げとは言い難い。大きさは長さ3.461cm、幅3.431cm、厚さ0.357cm、重量6.75g、双孔部は径0.2cmを測る。

なお、本跡の時期は、土師器等の遺物の出土がなく明確に判断できないが、古墳時代中期（5世紀代）と推定される。



第16図 第3号住居跡・出土遺物

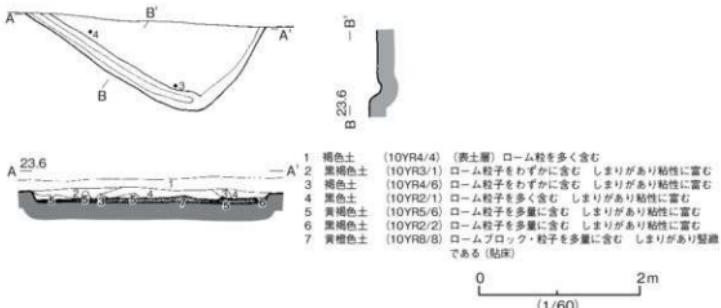
第3号住居跡

鉢図番号	種別	計測値			石質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
第16回1	双孔円板	3.461	3.431	0.357	(675)	滑石 一部欠損

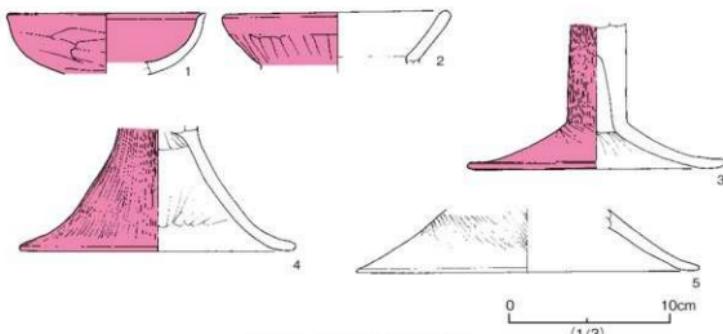
第4号住居跡 (S10 4) (第18・19図 P L 5・16)

調査区のはば中央、建物建築予定地である7区北側に位置する。やはり住居跡の大半が北側の未調査区域に延びており、住居南隅のみが調査可能となったものの、規模については確認することはできない。まず確認面の標高は23.36mである。確認されている規模は南壁延長(2.45)m、東壁延長(1.28)mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。検出されていない垣跡が北西側に設置されているものと推定すると主軸方位はN-31°-Wを示し、西側に傾いている。床面は4cm前後の比高差はあるものの起伏はなくほぼ平坦で、ローム粒・ロームブロックを混入した黄褐色土を1~6cm前後の厚さに敷きつめ、貼床にしていた。貼床は、検出部のはば全面硬化面が確認できるが、壁周辺はやや軟質であった。壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は4.0~10.0cmを測る。壁溝は南壁辺で構築しているものの、東壁辺では確認できない。規模は上面幅で

①



第17図 第4号住居跡



第18図 第4号住居跡出土遺物

16.0～22.0cm、深さ1.5～2.0cmの横断面U字状を呈する。炉跡および柱穴は確認できなかった。柱穴を含めた炉跡や貯蔵穴の構築についてはさらにもう区域の調査を待つしかないであろう。

住居跡の掘り方は特に深掘りした箇所はなく全体的に深さ1～6cm前後にわたり無造作に掘削し、そこにはロームブロック・ローム粒を多量に含む黄褐色土（10YR8/6）を叩き貼床としていた。また住居跡覆土は第1～6層まで確認されたが、いずれも自然堆積の状態を示している。

本跡から遺物として土師器が比較的纏まって出土している。いずれも床面上で検出されたものである。土師器は壺、壙、高壺である。

出土遺物 第18回1は壺である。体部は内湾気味に立ち上がり、口唇部は内削状を呈する。内外面とも赤彩が施されている。2は壙の口縁部破片、外傾して立ち上がる。3～5は高壺の脚部破片である。3は中実柱状に酷似した脚部は裾部でラッパ状に開く。4・5は脚部がハの字状開く。

なお、本跡の時期は、出土遺物である土師器からは古墳時代中期（5世紀中葉）と推定される。

第4号住居跡

鉢団番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考
第18回1	土師器	壺	[122]	3.8	—	石英・長石	にじむ褐色 7.5YR6-6	良好	外面ヨコナデ、ヘラケズリ、内面ヨコナデ、ヘラナデ。	口縁部1/6残存
2	土師器	壙	[142]	3.2	—	石英・長石	褐色7.5YR6-6 黒褐色7.5YR3-1	良好	外面ヨコナデ、ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	口縁部1/4残存
3	土師器	高壺	—	8.8	16.0	黒色粒子・石英・長石	暗赤褐色5YR3-2	良好	外面脚部ヘラナデ、底面ヨコナデ、内面ヘラナデ。	脚部残存、脚部2/3欠損
4	土師器	高壺	—	7.6	17.0	黒色粒子・石英・長石	浅黄褐色10YR	良好	脚部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	脚部残存、脚部2/3欠損
5	土師器	高壺	—	3.7	[21.0]	石英・長石	にじむ褐色 7.5YR6-4 黒褐色7.5YR3-1	良好	外面ヘラケズリ、ヘラナデ、内面ヘラナデ。	底面1/4残存

第6節 中世以降

ここでは中世から現代にわたる遺構や痕跡を扱う。これらの遺構には溝跡・土坑・柱穴状遺構（ピット）群などがあり、溝跡1条以外は伴う出土遺物が見られず、帰属時期を決定することが難しい。しかしながら、覆土の状況や溝跡との位置関係からすれば、溝跡の北側に集中する柱穴状遺構の多くや土坑の一部は中世の所産と考えられる。

1) 溝跡 (SD)

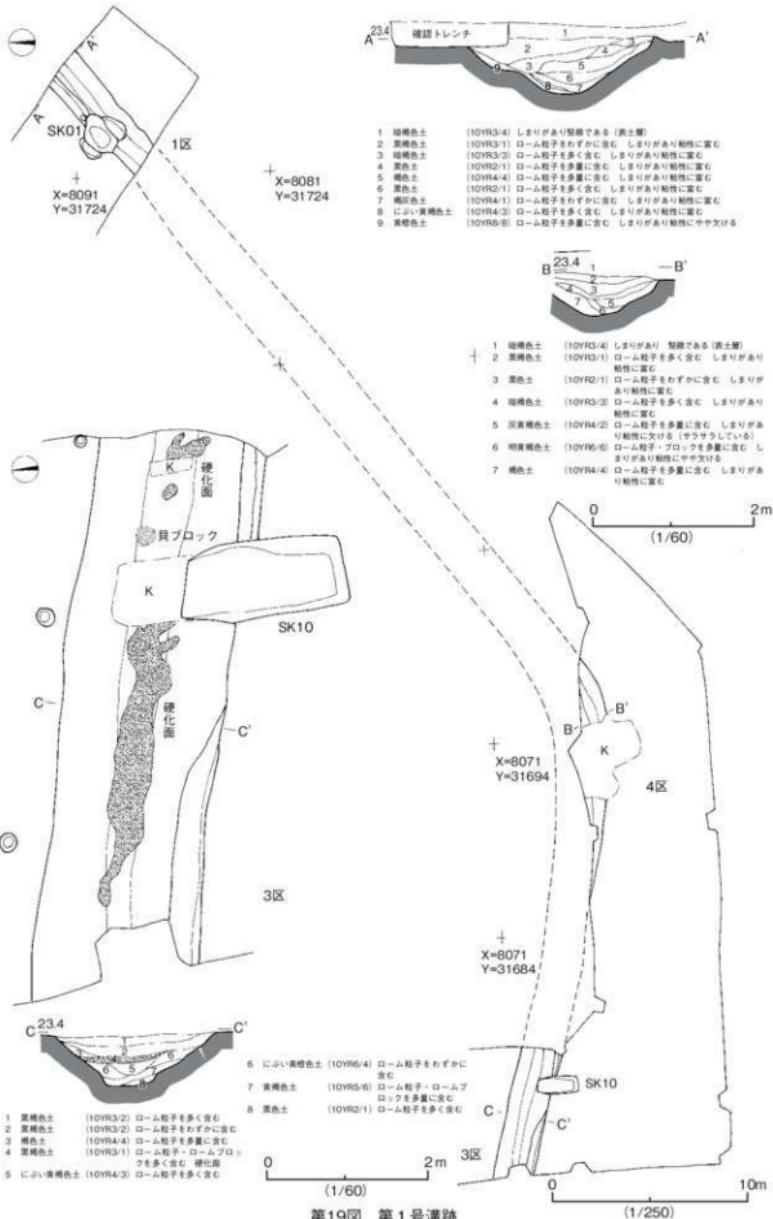
第1号溝跡 (SD01) (第19・20図1・2・4・5・7・8・10・11 P L 6・7・17・18)

調査区の範囲が全面調査でないため、溝跡の検出が3地点に跨ってしまった。しかし、未調査部分がかなりあるとはいっても、全体像は把握可能であり、これによってある程度溝の掘削状況を推定することが可能となった。この第1号溝跡は確認調査でも確認されていたものである。調査区北東側1区の東側では、長さ(6.37)m、上幅218m、下幅0.45m、深さ60.0cmの箱薬研堀の溝として確認され、走行方位はN-50°-Eを示し、北側が低く19cmの比高差を測る。土層はいわゆるレンズ状の自然堆積である。この堆積状況をみると東方である外側からの流れ込みが顕著である。この1区南端から35m南で4区調査区に達し、4区北辺に接するように本溝が検出されている。調査区の設定により南縁辺のみの調査であるが、北から2m付近から角度を西方向に変える。その角度は150°を測る。部分調査のため詳細な形状は把握できないが、1区および3区の検出された状況に酷似している。幅は不明であるが、長さ(12.60)m、深さ41.0cmの箱薬研堀の溝で、東側がわずかに低くなっている。土層はいわゆるレンズ状の自然堆積で、内側からの流れ込みがみられる。4区西端から西方8mで3区調査区に達する。検出した長さ(7.35)m、上幅2.0m、下幅0.32~0.58m、深さ66.0cmの箱薬研堀の溝で、走行方位はN-75°-Wを示し、西側が高く11cmの比高差を測る。土層はいわゆるレンズ状の自然堆積である。ここでは明瞭な流れ込み方向を把握できなかった。なお、確認面から深度35.0cmで道路跡と推定される硬化面が検出された。長さ約(6.0)m、幅15.0~50.0cmを測り擾乱等の影響で部分的に途切れているが溝方向と一致している。この硬化面に接して東側でマジミの貝ブロックが検出された。径35.0cm、厚さ2~3cmの範囲のはば純貝層を呈していた。貝総重量はわずか75gで、122個の貝殻が出土した。

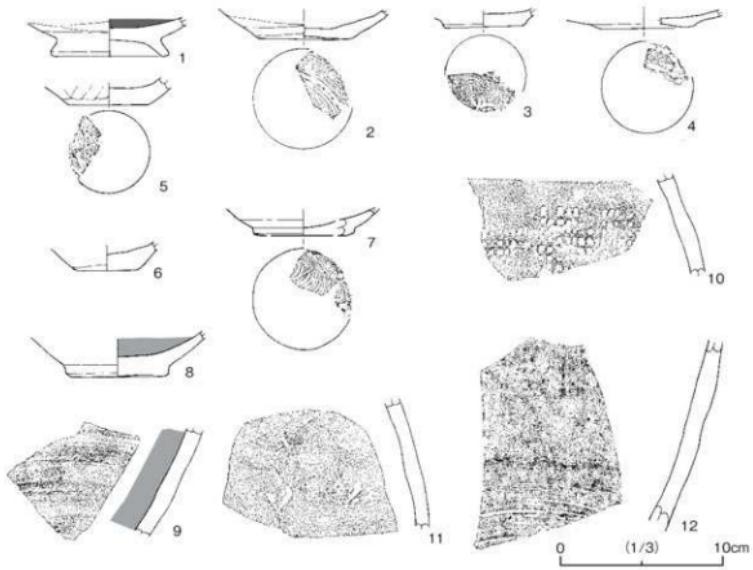
こうした貝殻以外に各区溝から遺物として、土師器・陶磁器・土師質土器が出土している。

出土遺物 第20図1は土師器の高台付塊である。ロクロ成形で、ハの字状に聞く高台が付く。块部内面は黒色処理が施されている。2・4・5・7は土師質土器小皿である。ロクロ成形で、2・4・5・7の底部は回転糸切りである。4については底面からの立ち上がりの状況から耳皿の可能性が考えられる。8は白磁IV類の碗でロクロ成形。内面全体と外面の一部に釉が施されている。底部は厚手で、高台部は削り出しによって成形されている。10・11は渥美産陶器の壺甌類の胴部破片である。外面に正格子の叩きが施されている。

これらの遺物の特徴から、本跡の時期は中世前半の12世紀から13世紀の範疇のものと推定される。



第19図 第1号溝跡



第20図 第1号溝跡ほか出土遺物

第1号溝跡ほか

辨別番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考
第20回1	土鍋器	高台付焼	-	(2.3)	[6.8]	赤色粒	にぶい黒	良好	高台が付く底面砸形、ロクロ成形。内部に黑色施され、鋸なミガが残る。	成都2-3 SD1-3区覆土
2.	土鍋質土器	小瓶	-	(1.8)	[5.6]	長石・雲母	にぶい黄褐	良好	底面部片、ロクロ成形。内部同心円状のロクロナギ。底面に緩やかな回転系切り目。	成都1-3 SD1-4区覆土
3.	土鍋質土器	小瓶	-	(0.9)	[4.9]	長石・雲母	にぶい黄褐	良好	底面部片、ロクロ成形。内部同心円状のロクロナギ。底面に緩やかな回転系切り目。	成都1-3 表鉢
4.	土鍋質土器	小瓶	-	(1.0)	[5.4]	雲母・赤色粒	にぶい黒	良好	底面部片、ロクロ成形。内部同心円状のロクロナギ。底面に緩やかな回転系切り目。	成都1-3 SD1-4区覆土
5.	土鍋質土器	小瓶	-	(1.0)	[4.9]	赤色粒	にぶい黒	良好	底面部片、ロクロ成形。内部同心円状のロクロナギ。底面に緩やかな回転系切り目。	成都1-3 SD1-3区覆土
6.	土鍋質土器	小瓶	-	(1.5)	[3.5]	長石	黒	良好	ロクロ成形。	底面のみ表鉢
7.	土鍋質土器	小瓶	-	(1.0)	[2.0]	石英・長石・雲母	黒褐 にぶい黒	良好	ロクロ成形。内外面ナメ。内部の中央や周囲も、底面はやや厚みを得ち、回転系切り目が残る。	確認検査出土 3丁目SEI
8.	壺器	碗型	-	(2.3)	5.9	灰白色の繊密な胎土。	灰白	良好	底面部片、ロクロ成形。厚手の底盤で、底面を高台状に削り出す。内部全体と外縁の一部に施釉。	白釉新規 SD1-3区覆土
9.	壺器	碗型	-	-	-	灰白色の胎土。	灰白	良好	底面部片の破片。ロクロ成形。外縁下部回転へき裂あり。内外面ナメ。内面に自然剥離付着。	灰文瓦陶器 表鉢
10.	壺器	垂葉型	-	-	-	灰色の胎土。	灰 灰オリーブ	良好	腹面部片、外面に正格子の叩きを施す。内面に輪積み痕あり。	灰文瓦陶器 SD1-1居
11.	壺器	垂葉型	-	-	-	灰色の胎土。	灰 灰オリーブ	良好	腹面部片。外縁の一部に正格子の叩きを施す。	灰文瓦陶器 SD1-3区覆土
12.	壺器	垂葉型	-	-	-	灰白色の胎土。 赤色粒。	にぶい黒 にぶい赤褐	良好	底面部片の破片を。ロクロ成形。外縁上部回転へき裂あり。内面ナマ。	灰文瓦陶器 SD1-3区覆土 確認検査出土

2) 土坑 (SK)

土坑は全部で27基確認され、帰属時期を確定できる遺物が出土しているものはない。

第1号土坑 (SK01) (第21図 P L 8)

調査区北東隅1区の南東寄りに位置し、第1号溝跡を切って構築されており、立地する標高は23.28mを測る。平面上3基の重複にみえるが、断面土層観察によれば1基と判断できる。平面形は東西にやや長い梢円形を呈し、確認面の上場長軸2.30m、短軸2.15m、下場長軸1.25m、短軸0.65m、深さ58.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦面が少なく起伏があり、全体的に軟弱で踏み固められた痕跡は認められない。覆土は8層に分層でき、自然堆積の状態を示している。

遺物の出土はなく、時期は不明である。また覆土はローム層が逆堆積する捻転土層は確認できないものの、縮りのない状況からみて比較的新しい風倒木痕の可能性もある。

第2号土坑 (SK02) (第21図 P L 8)

調査区北側2区の東寄りに位置し、立地する標高は23.29～23.31mを測る。P039と重複し、本遺構が新しい。平面形は確認面の上場長軸1.08m、短軸0.96m、下場長軸0.87m、短軸0.77mの梢円形を呈し、深さ14.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は2ヶ所の窪みがみられるが掘削痕ではなく、木根痕であろう。また全体的に軟弱で踏み固められた痕跡は認められない。覆土は3層に分層でき、いずれも埋め戻し土層である。

遺物の出土はなく、時期は不明であるが、覆土の状況から判断して中世と推定する。

第3号土坑 (SK03) (第21図 P L 8)

調査区の北側2区の東寄りに位置し、立地する標高は23.28mを測る。平面形は確認面の上場長軸1.19m、短軸1.05m、下場長軸0.87m、短軸0.87mの円形を呈し、深さ16.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で全体的に軟弱で踏み固められた痕跡は認められない。覆土は3層に分層でき、いずれも埋め戻し土層である。

遺物の出土はなく、時期は不明であるが、覆土の状況から判断して中世と推定する。

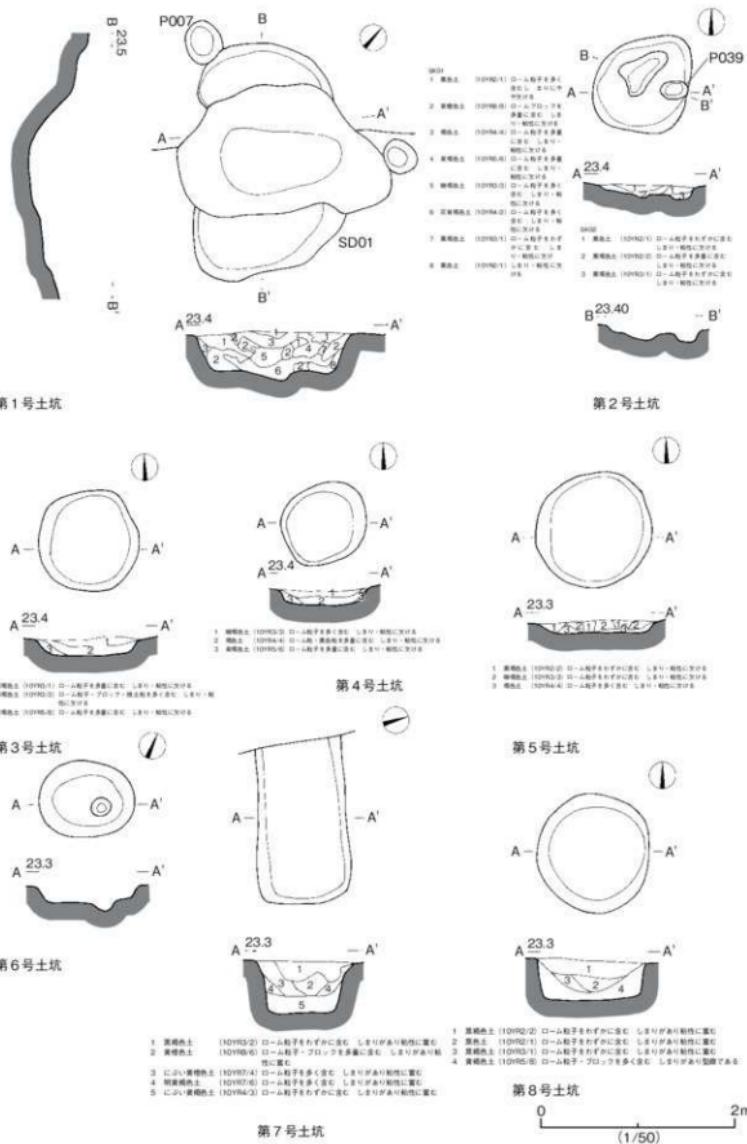
第4号土坑 (SK04) (第21図 P L 8)

調査区の北側2区の東寄りに位置し、立地する標高は23.24～23.27mを測る。平面形は確認面の上場長軸0.99m、短軸0.95m、下場長軸0.77m、短軸0.75mの円形を呈し、深さ15.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で全体的に軟弱で踏み固められた痕跡は認められない。覆土は3層に分層でき、いずれも埋め戻し土層である。

遺物の出土はなく、時期は不明であるが、覆土の状況から判断して中世と推定する。

第5号土坑 (SK05) (第21図 P L 8)

調査区の北側2区の中央付近に位置し、立地する標高は23.19～23.22mを測る。平面形は確認面の上場長軸1.19m、短軸1.17m、下場長軸1.09m、短軸0.92mの円形を呈し、深さ11.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で全体的に軟弱で踏み固められた痕跡は認められない。覆土は3層に分層でき、締まりのない埋め戻し土層である。



遺物の出土はなく、時期は不明であるが、覆土の状況から判断して中世と推定する。

第6号土坑（SK06）（第21図 P L 8）

調査区の西側3区の北寄りに位置し、立地する標高は23.16～23.17mを測る。平面形は確認面の上場長軸0.99m、短軸0.79m、下場長軸0.72m、短軸0.52mの東西に長い楕円形を呈し、深さ10.5cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で全体的に軟弱で踏み固められた痕跡は認められない。また東側にピットが認められる。径17.0×18.0cm、深さ6.0cmの円形を呈するものの、性格は不明である。覆土は黒褐色土（10YR3/2）の單一層でローム粒を多く含み、締りがなく、粘性に欠ける。埋め戻し土層である。

遺物の出土はなく、時期は不明であるが、覆土の状況から判断して中世と推定する。

第7号土坑（SK07）（第21図 P L 8）

調査区の西側3区の北寄りに位置し、西側が未調査区域に延びている。立地する標高は23.19mを測る。平面形は確認面の上場長軸（1.67）m、短軸0.89m、下場長軸（1.59）m、短軸0.74mの東西に長い長方形を呈し、深さ51.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。主軸方位はN-80°-Wを示し、底面は平坦で全体的に軟弱で踏み固められた痕跡は認められない。覆土は5層に分層でき、いずれも埋め戻し土層である。

遺物の出土はなく、時期は不明であるが、覆土の状況から判断して中世と推定する。

第8号土坑（SK08）（第21図 P L 8）

調査区の西側3区の北寄りに位置し、立地する標高は23.17～23.22mを測る。平面形は確認面の上場長軸1.23m、短軸1.13m、下場長軸0.96m、短軸0.96mの円形を呈し、深さ38.5cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で全体的に軟弱で踏み固められた痕跡は認められない。覆土は4層に分層でき、いずれも埋め戻し土層である。

遺物の出土はなく、時期は不明であるが、覆土の状況から判断して中世と推定する。

第9号土坑（SK09）（第22図 P L 9）

調査区の西側3区の中央に位置し、立地する標高は23.28～23.30mを測る。平面形は確認面の上場長軸2.92m、短軸0.90m、下場長軸2.59m、短軸0.62mの南北に長い長方形を呈し、深さ53.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。主軸方位はN-1°-Wを示し、底面は平坦で全体的に硬く踏み固められている。覆土は4層に分層でき、締まりのない埋め戻し土層である。

遺物の出土はなく、時期は不明であるが、覆土の締りのない状況から判断して近代以降の耕作用ピット（イモ穴）である。

第10号土坑（SK10）（第22図 P L 9）

調査区の西側3区の南寄りで第1号溝跡を切って構築している。立地する標高は23.33～23.38mを測る。平面形は確認面の上場長軸（1.99）m、短軸0.93m、下場長軸（1.84）m、短軸0.67mの南北に長い長方形を呈し、深さ58.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。主軸方位はN-2°-Wを示し、底面は平坦で全体的に硬く踏み固められている。覆土は3層に分層でき、締まりのない埋め戻し土層である。

遺物の出土はなく、時期は不明であるが、覆土の締りのない状況から判断して近代以降の耕作用ピット（イ

モ穴）である。

第11号土坑（SK11）（第22図 P L 9）

調査区の中央北5区に位置し、立地する標高は22.93～22.94mを測る。平面形は確認面の上場長軸1.42m、短軸1.10m、下場長軸1.20m、短軸0.84mの東西に長い長方形を呈し、深さ25.5cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。主軸方位はN-87°-Wを示し、底面は平坦で、全体的に軟弱で踏み固められた痕跡は認められない。覆土は3層に分層でき、いずれも埋め戻し土層である。

遺物の出土はなく、時期は不明であるが、覆土の状況から判断して中世と推定する。

第12号土坑（SK12）（第22図 P L 9）

調査区の中央北5区東端に位置し、北側が未調査区域に延びている。立地する標高は23.01mを測る。平面形は確認面の上場長軸（0.93）m、短軸0.89m、下場長軸（0.82）m、短軸0.76mの南北に長い長方形を呈し、深さ38.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。主軸方位はN-3°-Wを示し、底面は平坦で全体的に軟弱で踏み固められた痕跡は認められない。覆土は6層に分層でき、締まりのない埋め戻し土層である。

遺物の出土はなく、時期は不明であるが、覆土の状況から判断して中世と推定する。

第13号土坑（SK13）（第22図 P L 9）

調査区の中央北6区南西側に位置し、立地する標高は23.32～23.33mを測る。平面形は確認面の上場長軸1.57m、短軸1.09m、下場長軸1.29m、短軸0.77mの東西に長い長方形を呈し、深さ25.5cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。主軸方位はN-61°-Eを示し、底面は平坦で全体的に軟弱で踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土（10YR3/2）の單一層でローム粒を多く含み、締りがなく、粘性に欠ける。埋め戻し土層である。

遺物の出土はなく、時期は不明であるが、覆土の状況から判断して中世と推定する。

第14号土坑（SK14）（第22図 P L 10）

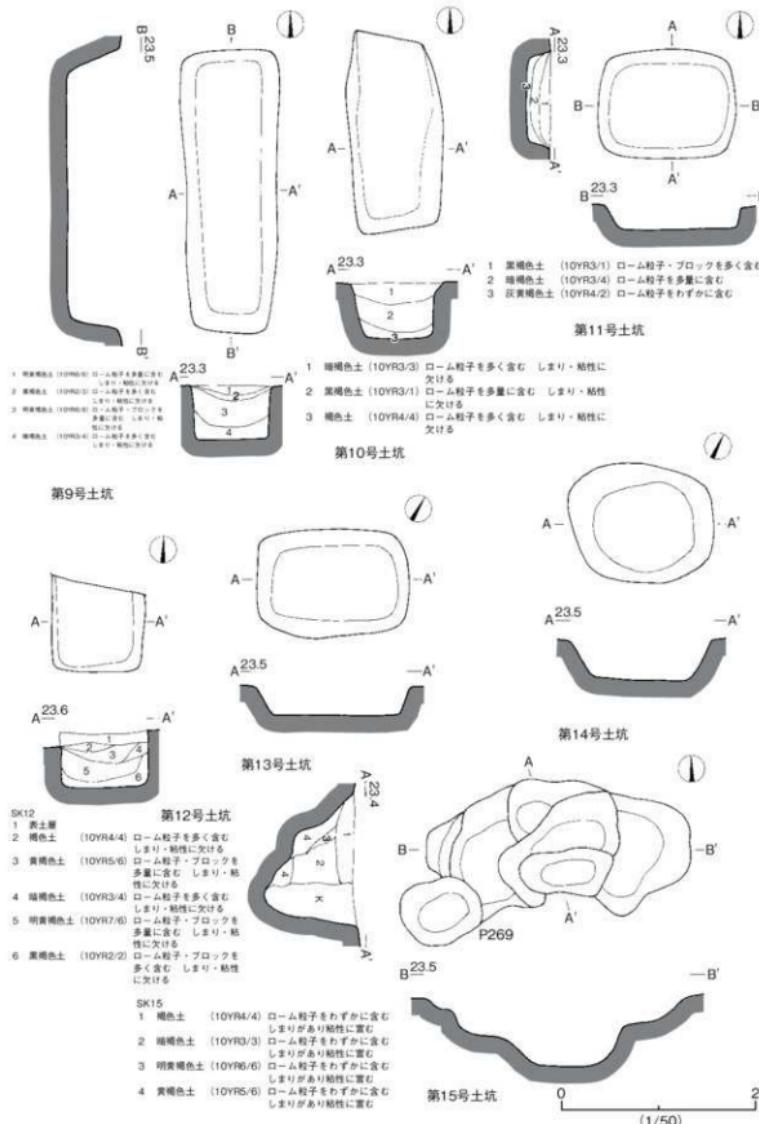
調査区の中央北6区西側に位置し、立地する標高は23.30～23.32mを測る。平面形は確認面の上場長軸1.51m、短軸1.02m、下場長軸1.21m、短軸0.90mの東西に長い楕円形を呈し、深さ42.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。主軸方位はN-74°-Eを示し、底面は平坦で全体的に軟弱で踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土（10YR3/2）の單一層でローム粒を多く含み、締りがなく、粘性に欠ける。埋め戻し土層である。

遺物の出土はなく、時期は不明であるが、覆土の状況から判断して中世と推定する。

第15号土坑（SK15）（第22図 P L 10）

調査区の中央北6区東側に位置し、立地する標高は23.28～23.34mを測る。平面形は確認面の上場長軸2.72m、短軸1.13m、下場長軸0.55m、短軸0.27mの東西に長い不正楕円形を呈し、深さ82.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦面が少なく起伏があり、全体的に軟弱で踏み固められた痕跡は認められない。覆土は4層に分層でき、自然堆積の状態を示している。

遺物の出土はなく、時期は不明である。また覆土はローム層が逆堆積する捻転土層は確認できないものの、



第22図 第9～15号土坑

締りの状況からみて比較的新しい風倒木痕の可能性もある。

第16号土坑（SK16）（第23図 P L 10）

調査区の中央北6区東側に位置し、立地する標高は23.28～23.30mを測る。平面形は確認面の上場長軸0.91m、短軸0.66m、下場長軸0.70m、短軸0.46mの南北に長い楕円形を呈し、深さ28.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。主軸方位はN-72°-Eを示し、底面は平坦で全体的に軟弱で踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土（10YR3/2）の單一層でローム粒を多く含み、締りがなく、粘性に欠ける。埋め戻し土層である。

遺物の出土はなく、時期は不明であるが、覆土の状況から判断して中世と推定する。

第17号土坑（SK17）（第23図 P L 10）

調査区の北東側1区の中央付近に位置している。立地する標高は22.84mを測る。平面形は確認面の上場長軸0.82m、短軸0.64m、下場長軸0.48m、短軸0.36mの南北に長い楕円形を呈し、深さ23.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で全体的に軟弱で踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土（10YR3/2）の單一層でローム粒を多く含み、締りがなく、粘性に欠ける。埋め戻し土層である。

遺物の出土はなく、時期は不明であるが、覆土の状況から判断して中世と推定する。

第18号土坑（SK18）（第23図 P L 10）

調査区の北東側1区の東寄りに位置し、第19・20号土坑と重複しており、両土坑を切っている。立地する標高は23.32mを測る。平面形は確認面の上場長軸0.86m、短軸0.84m、下場長軸0.64m、短軸0.45mの円形を呈し、深さ68.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。主軸方位はN-25°-Eを示し、底面は平坦で全体的に軟弱で踏み固められた痕跡は認められない。また東寄りにピットが認められる。径25.0×30.0cm、深さ5.0cmの円形を呈するものの、性格は不明である。覆土は黒褐色土（10YR3/2）の單一層でローム粒を多く含み、締りがなく、粘性に欠ける。埋め戻し土層である。

遺物の出土はなく、時期は不明であるが、覆土の状況から判断して中世と推定する。

第19号土坑（SK19）（第23図 P L 10）

調査区の北東側1区の東寄りに位置し、第18・20号土坑と重複しており、第18号土坑に切られ、第20号土坑に切られている。立地する標高は23.31mを測る。平面形は確認面の上場長軸(97.0)m、短軸0.61m、下場長軸(0.86)m、短軸0.48mの東西に長い楕円形を呈し、深さ12.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。主軸方位はN-87°-Wを示し、底面は平坦で全体的に軟弱で踏み固められた痕跡は認められない。また北寄りにピットが認められる。径15.0×17.0cm、深さ11.0cmの円形を呈するものの、性格は不明である。覆土は黒褐色土（10YR3/2）の單一層でローム粒を多く含み、締りがなく、粘性に欠ける。埋め戻し土層である。

遺物の出土はなく、時期は不明であるが、覆土の状況から判断して中世と推定する。

第20号土坑（SK20）（第23図 P L 10）

調査区の北東側1区の東寄りに位置し、第18・19号土坑と重複しており、両土坑に切られている。立地する標高は23.33mを測る。平面形は確認面の上場長軸0.63m、短軸(0.49)m、下場長軸0.51m、短軸(0.39)m

の南北に長い楕円形を呈し、深さ31.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。主軸方位はN-86°-Wを示し、底面は平坦で全体的に軟弱で踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土(10YR3/2)の単一層でローム粒を多く含み、締りがなく、粘性に欠ける。埋め戻し土層である。

遺物の出土はなく、時期は不明であるが、覆土の状況から判断して中世と推定する。

第21号土坑（SK21）（第23図）

調査区の北側2区の中央付近に位置し、立地する標高は23.27mを測る。平面形は確認面の上場長軸1.19m、短軸1.00m、下場長軸1.00m、短軸0.83mのやや東西に長い長方形を呈し、深さ24.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。主軸方位はN-88°-Wを示し、底面は平坦で全体的に軟弱で踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土(10YR3/2)の単一層でローム粒を多く含み、締りがなく、粘性に欠ける。埋め戻し土層である。

遺物の出土はなく、時期は不明であるが、覆土の状況から判断して中世と推定する。

第22号土坑（SK22）（第23図）

調査区の北側2区の中央付近に位置し、第23号土坑に切られている。立地する標高は23.23mを測る。平面形は確認面の上場長軸0.85m、短軸0.59m、下場長軸0.49m、短軸0.33mの南北に長い長方形を呈し、深さ24.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。主軸方位はN-14°-Eを示し、底面は平坦で全体的に軟弱で踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土(10YR3/2)の単一層でローム粒を多く含み、締りがなく、粘性に欠ける。埋め戻し土層である。

遺物の出土はなく、時期は不明であるが、覆土の状況から判断して中世と推定する。

第23号土坑（SK23）（第23図）

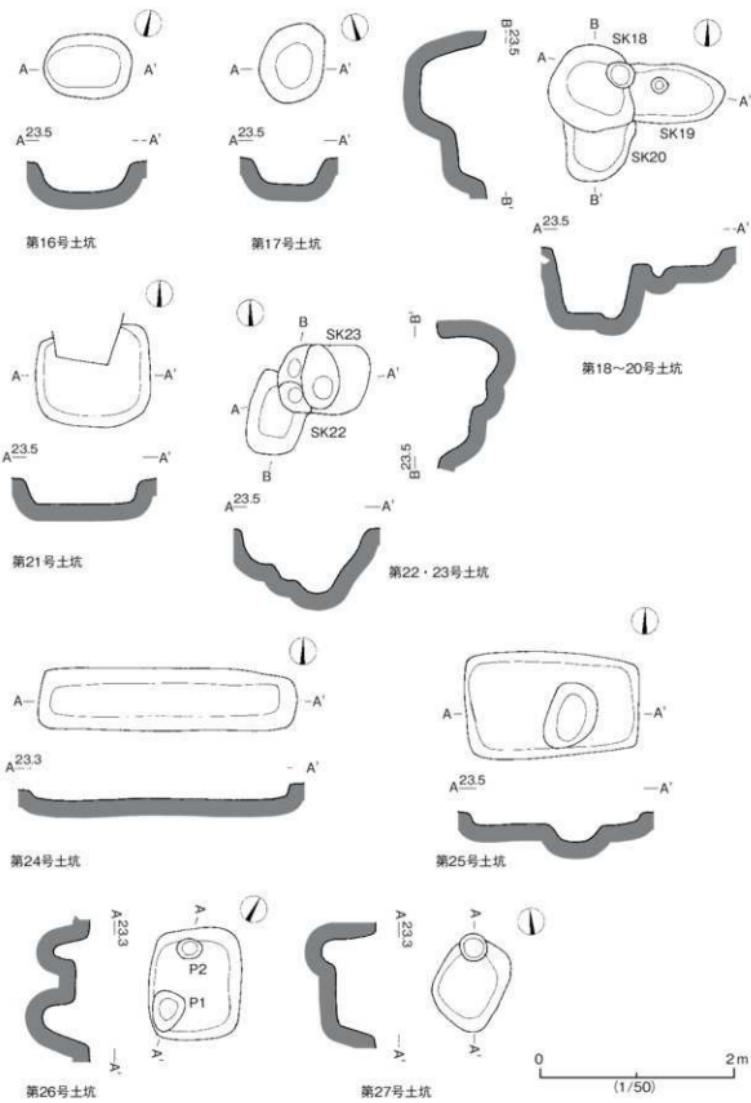
調査区の北側2区の中央付近に位置し、第22号土坑を切って構築されている。立地する標高は23.23mを測る。平面形は確認面の上場長軸0.92m、短軸0.69m、下場長軸0.22m、短軸0.19mの東西に長い長方形を呈し、深さ58.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。主軸方位はN-89°-Eを示し、底面は起伏があり、何回にもわたり掘削されていた。また底面は全体的に軟弱で踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土(10YR3/2)の単一層でローム粒を多く含み、締りがなく、粘性に欠ける。埋め戻し土層である。

遺物の出土はなく、時期は不明であるが、覆土の状況から判断して中世と推定する。

第24号土坑（SK24）（第23図）

調査区の北側2区の西寄りに位置し、立地する標高は23.10~23.16mを測る。平面形は確認面の上場長軸2.65m、短軸0.59m、下場長軸2.36m、短軸0.34mの東西に長い長方形を呈し、深さ9.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。主軸方位はN-84°-Eを示し、底面は平坦で全体的に軟弱で踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土(10YR3/2)の単一層でローム粒を多く含み、締りがなく、粘性に欠ける。埋め戻し土層である。

遺物の出土はなく、時期は不明であるが、覆土の締りのない状況から判断して近代以降の耕作用ピット（イモ穴）である。



第23図 第16~27号土坑

第25号土坑（SK25）（第23図）

調査区の南側4区の東寄りに位置し、立地する標高は23.24～23.26mを測る。平面形は確認面の上場長軸1.80m、短軸1.08m、下場長軸1.66m、短軸0.89mの東西に長い長方形を呈し、深さ12.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。主軸方位はN-88°-Eを示し、底面は平坦で全体的に軟弱で踏み固められた痕跡は認められない。また東寄りにピットが認められる。径50.0×70.0cm、深さ15.0cmの楕円形を呈するものの、性格は不明である。覆土は黒褐色土(10YR3/2)の單一層でローム粒を多く含み、繊りがなく、粘性に欠ける。埋め戻し土層である。

遺物の出土はなく、時期は不明であるが、覆土の状況から判断して中世と推定する。

第26号土坑（SK26）（第23図）

調査区の中央7区の北西隅に位置し、立地する標高は23.02～23.05mを測る。平面形は確認面の上場長軸1.13m、短軸0.92m、下場長軸0.94m、短軸0.77mの南北に長い長方形を呈し、深さ13.3cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。主軸方位はN-33°-Wを示し、底面は平坦で全体的に軟弱で踏み固められた痕跡は認められない。また南側と北側にピットが認められる。南端のP1は径41.0×31.0cm、深さ37.0cmの楕円形。北端のP2は径21.0×23.0cm、深さ26.0cmの円形を呈するものの、性格は不明である。覆土は黒褐色土(10YR3/2)の單一層でローム粒を多く含み、繊りがなく、粘性に欠ける。埋め戻し土層である。

遺物の出土はなく、時期は不明であるが、覆土の状況から判断して中世と推定する。

第27号土坑（SK27）（第23図）

調査区の中央7区の中央南寄りに位置し、立地する標高は23.02～23.05mを測る。平面形は確認面の上場長軸0.91m、短軸0.73m、下場長軸0.67m、短軸0.51mの南北に長い楕円形を呈し、深さ36.5cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。主軸方位はN-33°-Eを示し、底面は平坦、全体的に軟弱で踏み固められた痕跡は認められない。また北端にピットが認められる。径27.0×29.0cm、深さ19.0cmの円形を呈するものの、性格は不明である。覆土は3層に分層でき、いずれも埋め戻し土層である。

遺物の出土はなく、時期は不明であるが、覆土の状況から判断して中世と推定する。

3) 不明遺構 (SX)

第1号不明遺構 (SX01) (第24図)

調査区の東端1区に位置する。遺構は溝状を呈し鉤型に屈曲している。西端は第1号溝跡に接しているが、当遺構が新しい。規模は延べ長さ5.60m、幅0.3~0.68m、深さ0.2~0.34mを測る。壁面は緩く傾斜し、底面は平坦が少ない。覆土は黒色土(10Y2/1)の單一層でローム粒を多く含み、締りがなく、粘性に欠ける。遺物の出土はなく、時期は不明である。なお、土層の堆積状況からみて木根痕と推定する。

第2号不明遺構 (SX02) (第27図)

調査区の北側2区の西端に位置する。遺構は溝状を呈している。北端は未調査区域に延びている。規模は長さ(1.0)m、幅0.19m、深さ0.06mを測る。壁面は緩く傾斜し、底面は平坦が少ない。覆土は黒色土(10Y2/1)の單一層でローム粒を多く含み、締りがなく、粘性に欠ける。遺物の出土はなく、時期は不明である。なお、土層の堆積状況からみて木根痕と推定する。

第3号不明遺構 (SX03) (第27図)

調査区の北側2区の西端に位置する。遺構は溝状を呈している。遺構の大半は未調査区域に延びている。検出した規模は長さ(6.4)m、深さ0.23mを測る。壁面は緩く傾斜し、底面は確認できない。覆土は黒色土(10Y2/1)の單一層でローム粒を多く含み、締りがなく、粘性に欠ける。遺物の出土はなく、時期は不明である。なお、土層の堆積状況からみて芋穴と推定する。

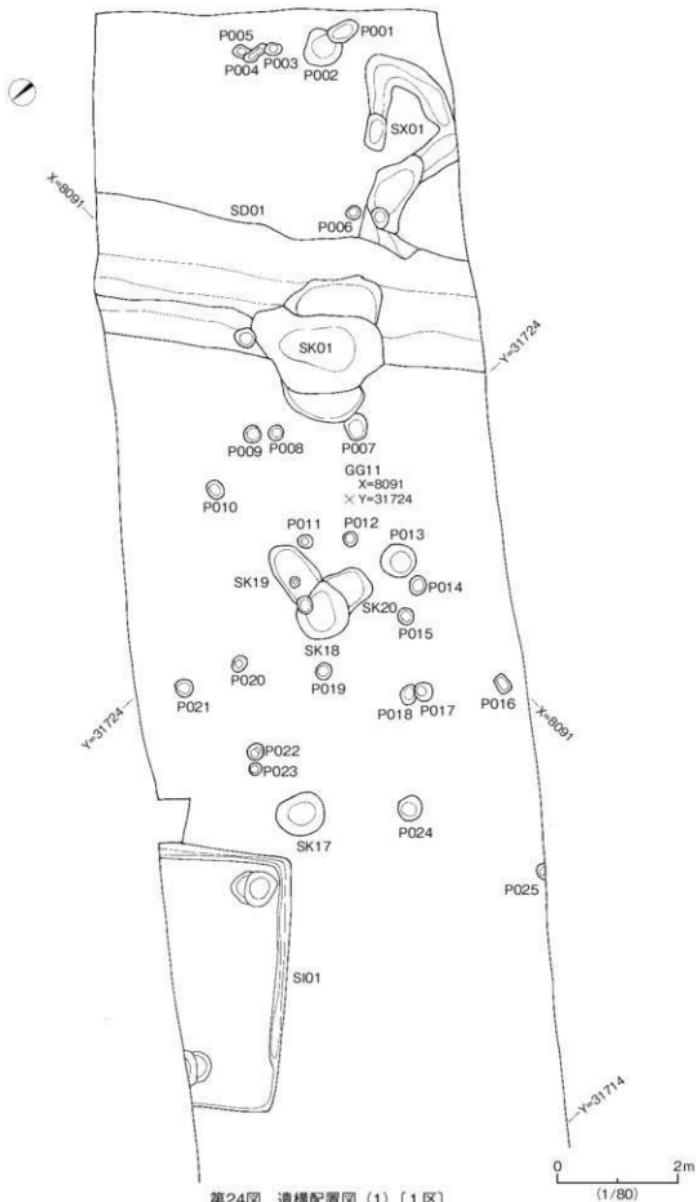
4) 柱穴状遺構群 (ピット群) (第24~33図 P L14)

本調査区全体からいわゆるピットと呼称される柱穴状遺構(以下ピットと呼ぶ)が検出された。調査されたピットの総数は437基を数える。形状は円形、楕円形、方形、長方形とバラエティーに富んでいる。また規模について全体的にかなりのばらつきがみられる。なお、検出された437基すべてのピットを検討したものの、直線的で間尺の合った明瞭な配列構造をもつものはなく、しかも覆土中より遺物の出土はなかったため、その性格については明瞭ではない。少なくとも埋土は黒色土で覆われていたこと、掘り方の多くはほぼ垂直気味に落ち込んでいたことから単独もしくは複数が組み合わさって何らかの機能をもった構造物の存在が想定される。小屋や置物などの粗雑で貧弱な柱構造の建物あるいは棚状構造物、樋、物干し杭などの柱あるいは杭跡等が考えられるがいずれもこれといった決定的な痕跡を検証することができなかった。

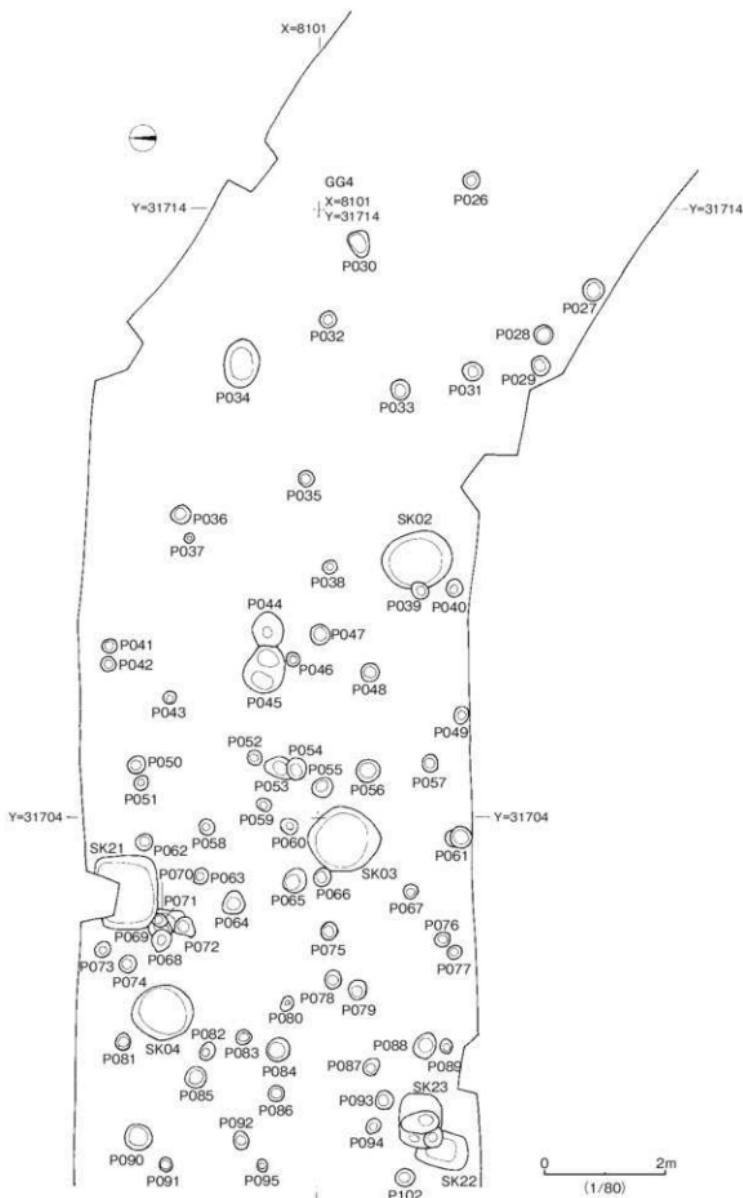
これらのピット群の中で、P287・288・322・334・341・356・358・359・367・376・401では底面に「あたり」とも呼ばれる柱根痕が確認されている。そして、これらのピット群を構成するピットの多くは覆土の特徴が第1号溝跡など中世の遺構と考えられるものと類似している。また、この弧を描く第1号溝跡の内側で検出されたものが多いことから関連性が窺える。このようなことから、ピット群を構成するピットの多くは中世の所産と考えられる。しかしながら、これらのピットの中にはP146・149・197~203・267・273・283・312・329などのような、平面形態などが明らかにほかと異なる近現代の掘り込みも確認されている。

そこで、今回検出されたすべてのピットを計測し、一覧表に掲げた。

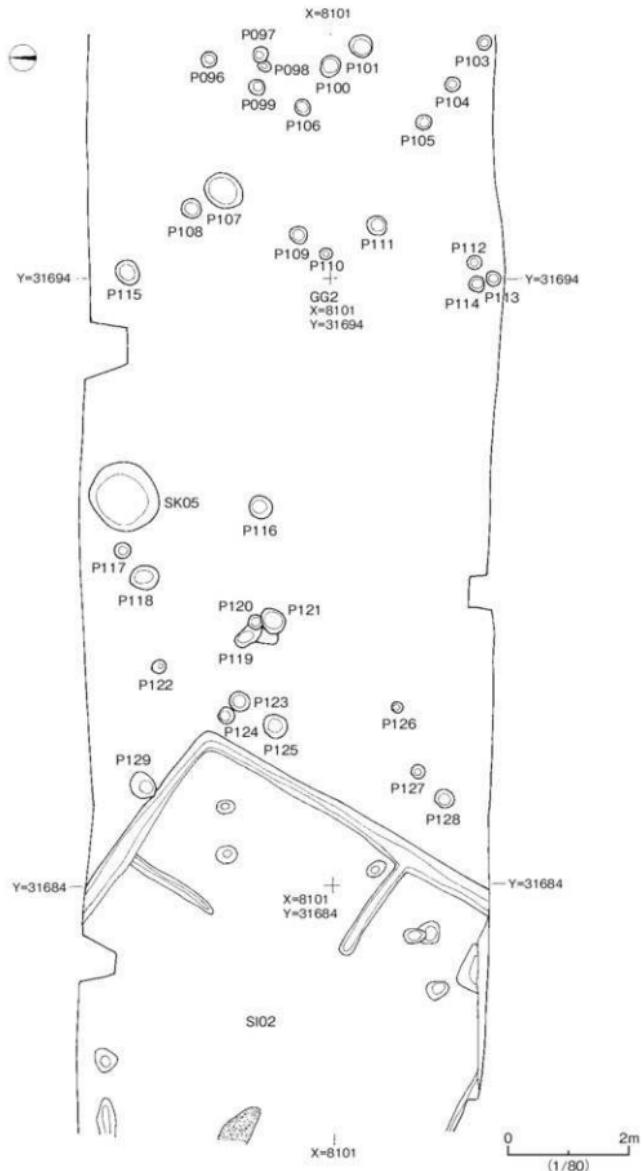
(小川和博)



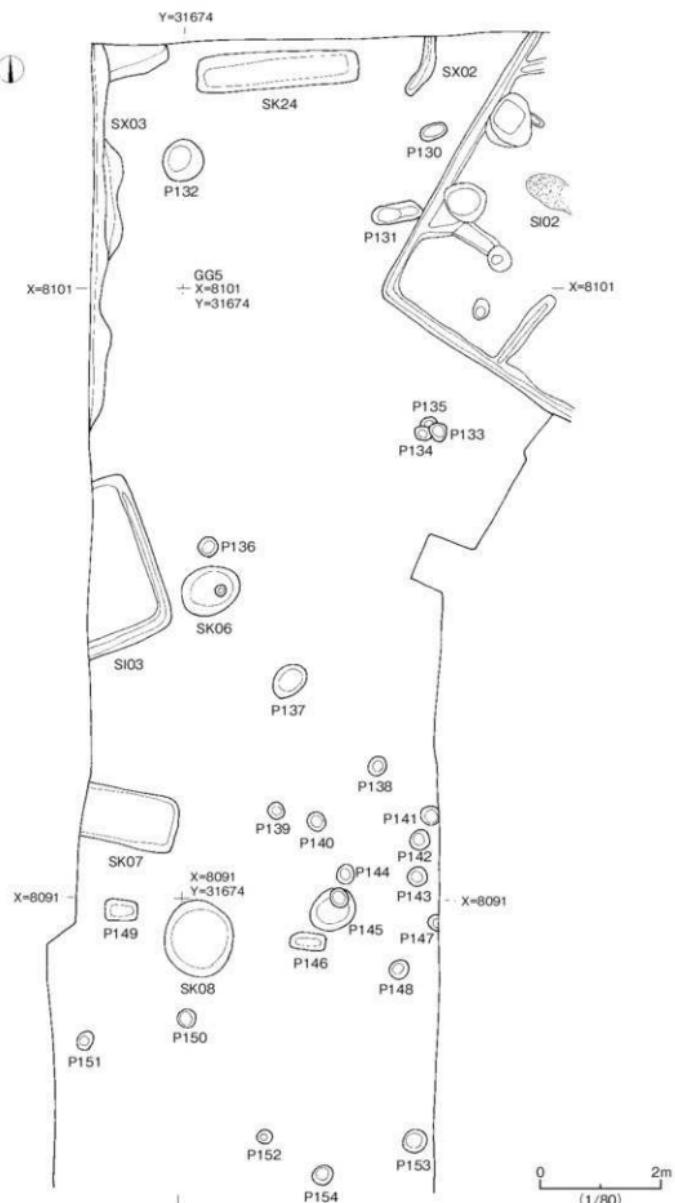
第24図 遺構配置図(1) [1区]



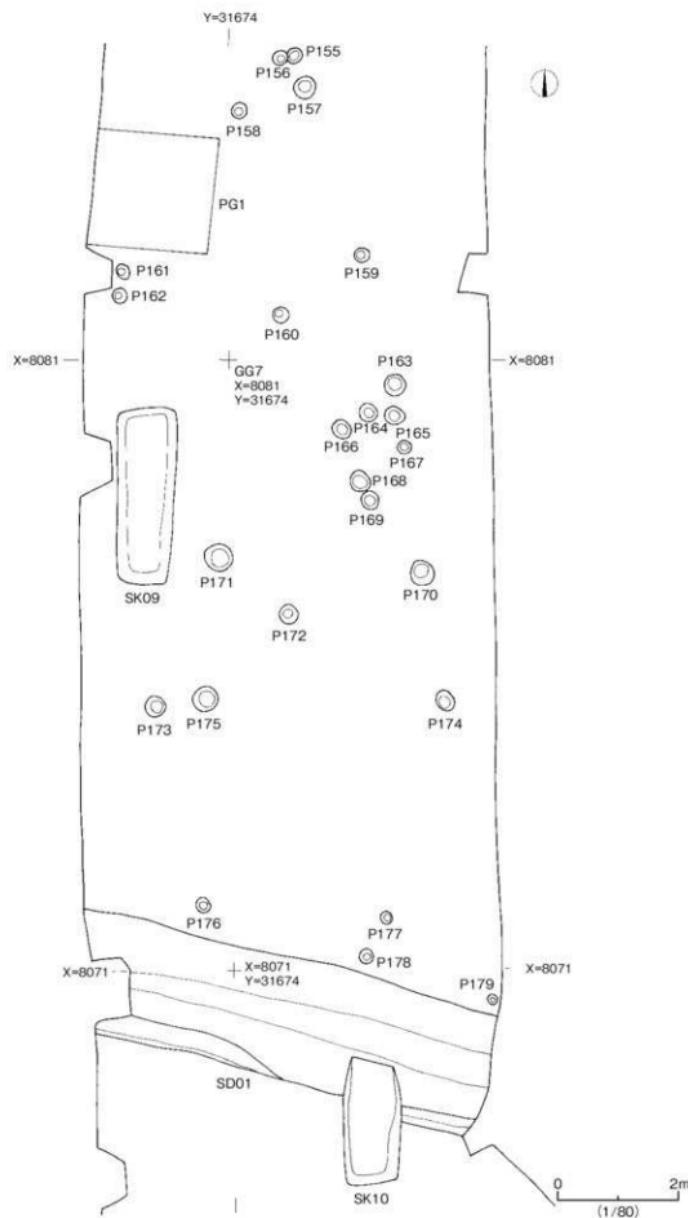
第25図 遺構配置図(2) [1・2区]



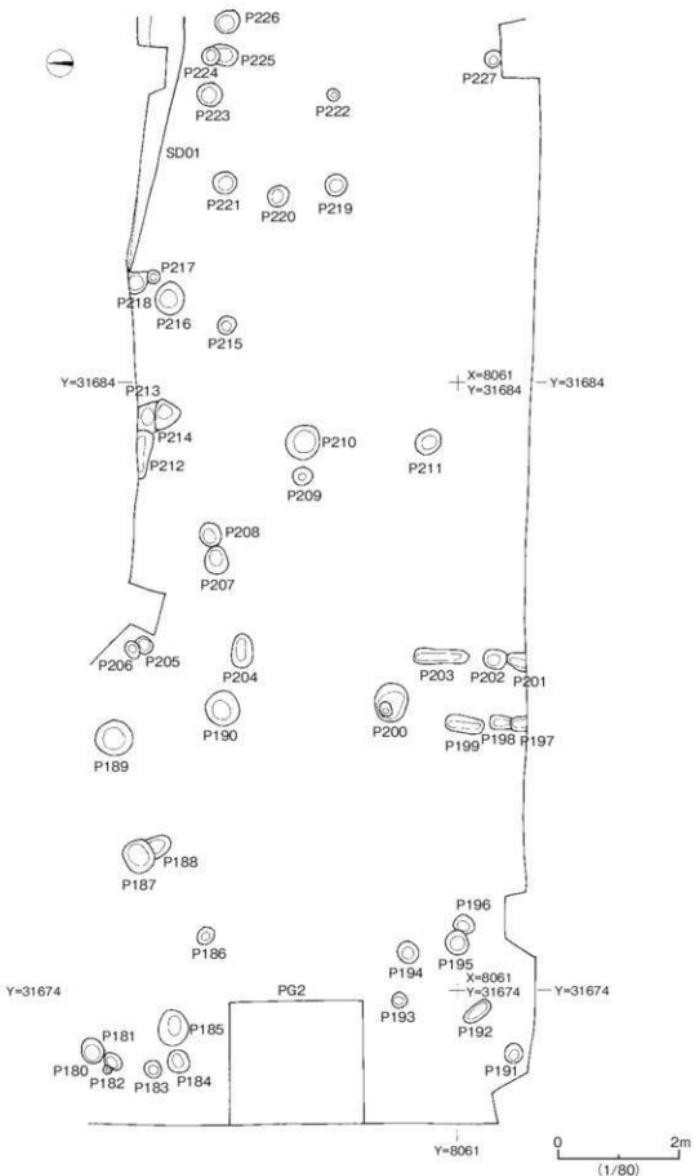
第26図 遺構配置図(3) [2区]



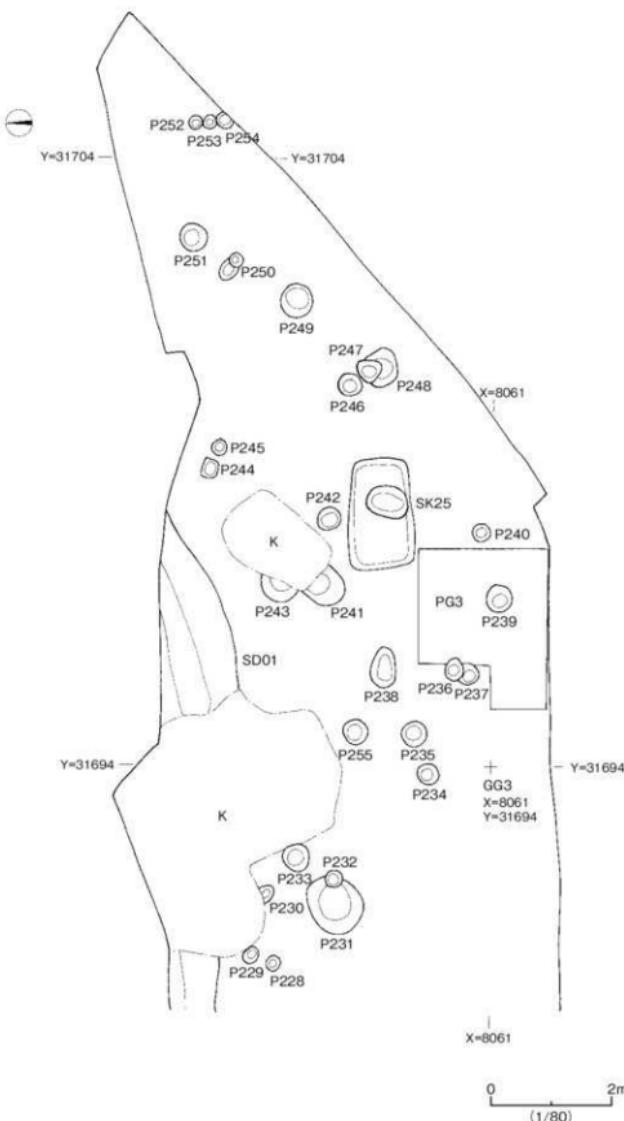
第27図 遺構配置図(4) [2・3区]



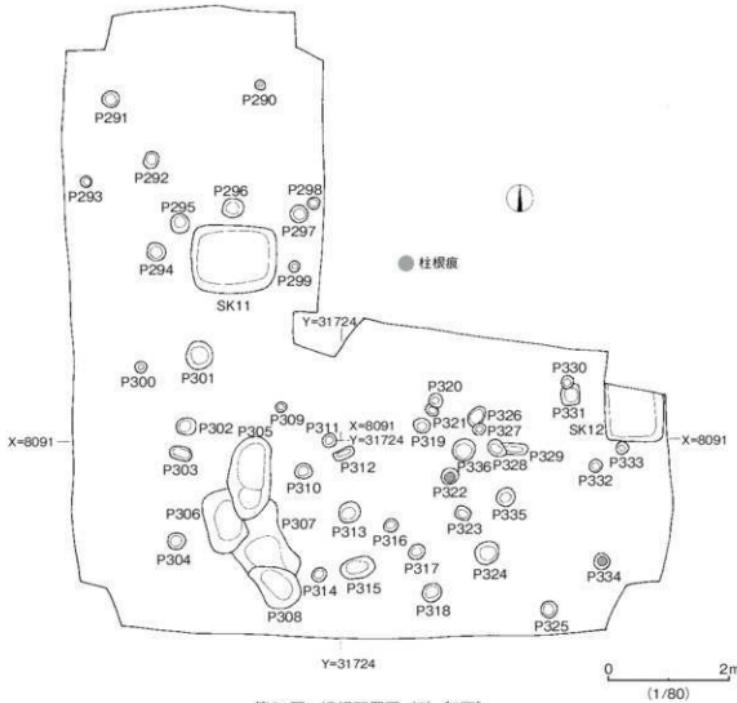
第28図 遺構配置図(5) [3区]



第29図 遺構配置図(6) [3・4区]



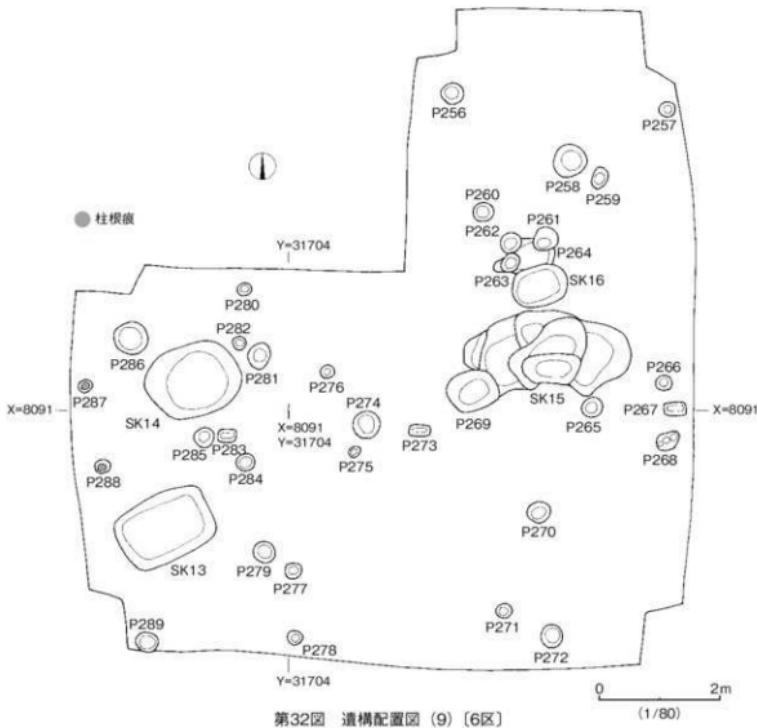
第30図 遺構配置図(7) [4区]



第31図 遺構配置図(8)[5区]

柱穴状遺構計測表

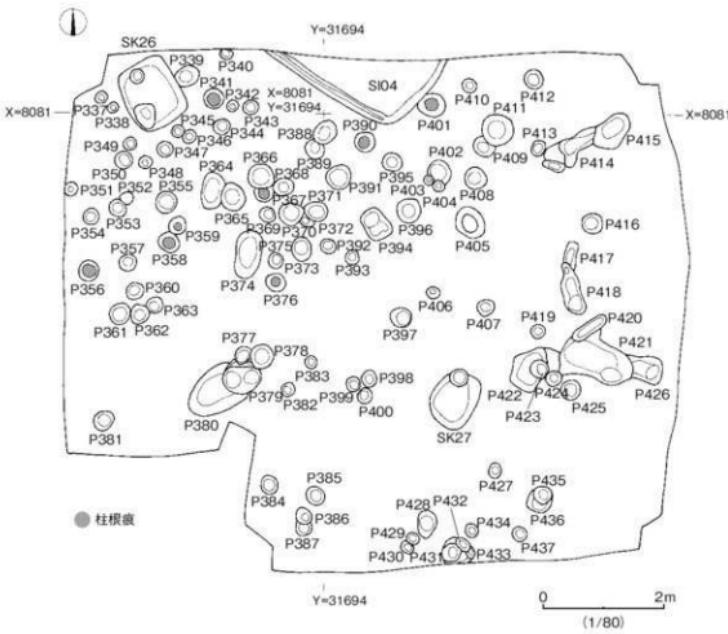
下番号	測査区	形状	規模 (長径cm × 短径cm)	深さ (cm)	備考	下番号	測査区	形状	規模 (長径cm × 短径cm)	深さ (cm)	備考
P01	1区	楕円形	52.0 × 30.0	35.0		P29	2区	楕円形	35.0 × 27.0	16.0	
P02	1区	不正円形	67.0 × 65.0	23.0		P30	2区	不正椭円形	44.0 × 31.0	26.0	
P03	1区	楕円形	30.0 × 21.0	23.0		P31	2区	円形	31.0 × 29.0	21.0	
P04	1区	不正円形	45.0 × 14.0	16.0		P32	2区	円形	28.0 × 25.0	15.0	
P05	1区	不正円形	(31.0) × 20.0	9.0		P33	2区	円形	34.0 × 31.0	25.0	
P06	1区	円形	22.0 × 22.0	10.0		P34	2区	椭円形	78.0 × 59.0	8.5	
P07	1区	楕円形	46.0 × 36.0	12.0		P35	2区	円形	24.0 × 23.0	10.0	
P08	1区	円形	27.0 × 24.0	31.0		P36	2区	円形	30.0 × 28.0	32.0	
P09	1区	円形	28.0 × 27.0	30.0		P37	2区	円形	15.0 × 15.0	8.0	
P10	1区	椭円形	32.0 × 25.0	21.0		P38	2区	円形	22.0 × 20.0	26.0	
P11	1区	円形	22.0 × 22.0	9.0		P39	2区	椭円形	30.0 × 24.0	24.0	
P12	1区	円形	22.0 × 22.0	16.5		P40	2区	円形	31.0 × 25.0	30.0	
P13	1区	円形	60.0 × 53.0	28.0		P41	2区	円形	22.0 × 21.0	32.0	
P14	1区	円形	30.0 × 28.0	21.5		P42	2区	円形	23.0 × 23.0	18.0	
P15	1区	円形	26.0 × 25.0	8.0		P43	2区	円形	21.0 × 20.0	16.0	
P16	1区	長方形	36.0 × 20.0	21.0		P44	2区	円形	55.0 × 49.0	22.0	
P17	1区	円形	28.0 × 25.0	29.0		P45	2区	円形	78.0 × 65.0	38.0	
P18	1区	円形	32.0 × 28.0	24.0		P46	2区	円形	25.0 × 24.0	26.0	
P19	1区	円形	28.0 × 24.0	33.0		P47	2区	円形	35.0 × 33.0	55.0	
P20	1区	円形	25.0 × 22.0	6.0		P48	2区	円形	31.0 × 30.0	30.0	
P21	1区	円形	27.0 × 26.0	34.0		P49	2区	椭円形	30.0 × 24.0	28.5	
P22	1区	円形	27.0 × 23.0	15.0		P50	2区	円形	30.0 × 24.0	28.0	
P23	1区	円形	22.0 × 19.0	11.0		P51	2区	円形	23.0 × 20.0	32.0	
P24	1区	円形	40.0 × 37.0	22.0		P52	2区	円形	25.0 × 24.0	32.0	
P25	1区	(円形)	23.0 × (12.0)	8.0		P53	2区	椭円形	(36.0) × 33.0	45.0	
P26	2区	円形	27.0 × 26.0	7.0		P54	2区	椭円形	35.0 × 30.0	69.0	
P27	2区	円形	36.0 × 36.0	39.0		P55	2区	椭円形	33.0 × 29.0	44.0	
P28	2区	円形	35.0 × 30.0	42.0		P56	2区	椭円形	40.0 × 36.0	41.0	



第32図 遺構配置図 (9) [6区]

(1/80)

下番号	測量区	形状	規模 (長径cm×短径cm)	深度 (cm)	備考	下番号	測量区	形状	規模 (長径cm×短径cm)	深度 (cm)	備考
P57	2区	円形	28.0 × 24.0	9.0		P85	2区	円形	35.0 × 31.0	47.0	
P58	2区	円形	25.0 × 23.0	33.0		P86	2区	円形	25.0 × 25.0	7.0	
P59	2区	円形	22.0 × 22.0	29.0		P87	2区	楕円形	30.0 × 24.0	8.0	
P60	2区	円形	26.0 × 25.0	11.0		P88	2区	楕円形	40.0 × 33.0	15.0	
P61	2区	円形	40.0 × 37.0	50.0		P89	2区	円形	21.0 × 20.0	33.0	
P62	2区	円形	29.0 × 26.0	24.0		P90	2区	円形	43.0 × 43.0	35.0	
P63	2区	円形	24.0 × 20.0	28.0		P91	2区	円形	25.0 × 21.0	8.0	
P64	2区	円形	42.0 × 33.0	18.0		P92	2区	楕円形	33.0 × 26.0	16.0	
P65	2区	円形	40.0 × 36.0	22.0		P93	2区	円形	28.0 × 27.0	18.0	
P66	2区	円形	30.0 × 27.0	48.0		P94	2区	楕円形	27.0 × 22.0	18.0	
P67	2区	円形	22.0 × 20.0	11.0		P95	2区	楕円形	20.0 × 16.0	9.0	
P68	2区	不正円形	35.0 × 32.0	51.0		P96	2区	円形	24.0 × 23.0	13.0	
P69	2区	椭円形	35.0 × (30.0)	22.0		P97	2区	円形	27.0 × 22.0	11.0	
P70	2区	円形	25.0 × 22.0	57.0		P98	2区	円形	19.0 × 15.0	6.0	
P71	2区	(不正楕円形)	(45.0) × 38.0	22.0		P99	2区	円形	27.0 × 26.0	35.0	
P72	2区	不正楕円形	37.0 × 27.0	28.0		P100	2区	円形	37.0 × 32.0	39.0	
P73	2区	円形	26.0 × 23.0	36.0		P101	2区	円形	37.0 × 35.0	39.0	
P74	2区	円形	27.0 × 24.0	9.0		P102	2区	円形	32.0 × 28.0	7.0	
P75	2区	円形	32.0 × 28.0	36.0		P103	2区	円形	26.0 × 21.0	40.0	
P76	2区	円形	27.0 × 26.0	5.0		P104	2区	円形	23.0 × 23.0	13.0	
P77	2区	円形	25.0 × 23.0	33.0		P105	2区	円形	27.0 × 23.0	18.0	
P78	2区	円形	28.0 × 24.0	14.0		P106	2区	円形	27.0 × 25.0	16.0	
P79	2区	円形	32.0 × 30.0	19.0		P107	2区	楕円形	67.0 × 57.0	9.0	
P80	2区	円形	22.0 × 20.0	6.0		P108	2区	円形	32.0 × 31.0	11.0	
P81	2区	円形	27.0 × 22.0	16.0		P109	2区	円形	28.0 × 27.0	31.0	
P82	2区	楕円形	31.0 × 24.0	13.0		P110	2区	円形	19.0 × 18.0	35.0	
P83	2区	円形	26.0 × 26.0	33.0		P111	2区	円形	32.0 × 31.0	28.0	
P84	2区	円形	39.0 × 39.0	44.0		P112	2区	円形	23.0 × 22.0	7.0	



第33図 遺構配置図 (10) [7区]

番号	測点区	形状	範囲 (直径mm × 厚さmm)	深さ (cm)	備考	番号	測点区	形状	範囲 (直径mm × 厚さmm)	深さ (cm)	備考
P113	2 IK	円形	22.0 × 22.0	36.0		P141	3 IK	円形	32.0 × 32.0	25.0	
P114	2 IK	円形	25.0 × 25.0	11.0		P142	3 IK	円形	35.0 × 30.0	16.0	
P115	2 IK	円形	40.0 × 36.0	7.0		P143	3 IK	円形	32.0 × 30.0	27.0	
P116	2 IK	円形	36.0 × 35.0	—		P144	3 IK	円形	30.0 × 28.0	20.0	
P117	2 IK	楕円形	22.0 × 23.0	—		P145	3 IK	円形	30.0 × 66.0	12.0	
P118	2 IK	楕円形	47.0 × 37.0	20		P146	3 IK	扇形	60.0 × 26.0	14.0	後現代
P120	2 IK	円形	30.0 × 25.0	31.0		P147	3 IK	(円形)	28.0 × (16.0)	18.0	
P119	2 IK	不正楕円形	51.0 × 25.0	—		P148	3 IK	扇形	36.0 × 29.0	34.0	
P121	2 IK	円形	36.0 × 23.0	32.0		P149	3 IK	扇形	53.0 × 34.0	14.0	後現代
P122	2 IK	円形	36.0 × 30.0	55.0		P150	3 IK	円形	31.0 × 29.0	20.0	
P123	2 IK	円形	34.0 × 30.0	37.0		P151	3 IK	扇形	30.0 × 24.0	19.0	
P124	2 IK	円形	27.0 × 26.0	31.0		P152	3 IK	扇形	27.0 × 22.0	22.0	
P125	2 IK	円形	36.0 × 37.0	31.0		P153	3 IK	円形	40.0 × 36.0	18.0	
P126	2 IK	円形	21.0 × 20.0	11.0		P154	3 IK	円形	33.0 × 31.0	13.0	
P127	2 IK	円形	23.0 × 22.0	8.0		P155	3 IK	円形	21.0 × 21.0	8.0	
P128	2 IK	円形	31.0 × 31.0	19.0		P156	3 IK	円形	23.0 × 21.0	4.0	
P129	2 IK	円形	42.0 × 40.0	18.0		P157	3 IK	円形	34.0 × 33.0	14.0	
P130	2 IK	楕円形	44.0 × 27.0	21.5		P158	3 IK	円形	25.0 × 22.0	11.0	
P131	2 IK	楕円形	85.0 × 33.0	22.0		P159	3 IK	円形	23.0 × 22.0	4.0	
P132	2 IK	円形	68.0 × 67.0	19.5		P160	3 IK	円形	25.0 × 25.0	15.0	
P133	3 IK	不正円形	33.0 × 27.0	20.0		P161	3 IK	扇形	24.0 × 26.0	7.0	
P134	3 IK	円形	25.0 × 25.0	30.0		P162	3 IK	円形	24.0 × 24.0	10.0	
P135	3 IK	(円形)	25.0 × (16.0)	9.0		P163	3 IK	円形	39.0 × 37.0	24.0	
P136	3 IK	円形	31.0 × 31.0	—	P164	3 IK	円形	30.0 × 29.0	32.0		
P137	3 IK	楕円形	66.0 × 47.0	25.5		P165	3 IK	円形	35.0 × 30.0	25.0	
P138	3 IK	楕円形	32.0 × 25.0	36.0		P166	3 IK	円形	30.0 × 28.0	40.0	
P139	3 IK	円形	27.0 × 24.0	12.0		P167	3 IK	円形	22.0 × 21.0	13.0	
P140	3 IK	円形	29.0 × 29.0	10.0		P168	3 IK	円形	33.0 × 31.0	17.0	

P番号	調査区	形状	規模 (長径cm×短径cm)	深度 (cm)	備考	P番号	調査区	形状	規模 (長径cm×短径cm)	深度 (cm)	備考
P319	5 IK	円形	25.0 × 24.0	39.5		P389	7 IK	円形	31.0 × 27.0	11.0	
P320	5 IK	円形	25.0 × 21.0	45.0		P390	7 IK	円形	33.0 × 33.0	47.0	柱根痕
P321	5 IK	円形	20.0 × (13.0)	30.0		P391	7 IK	円形	43.0 × 41.0	9.0	
P322	5 IK	円形	25.0 × 24.0	48.0	柱根痕	P392	7 IK	円形	23.0 × 22.0	31.0	
P323	5 IK	楕円形	24.0 × 20.0	17.0		P393	7 IK	円形	22.0 × 21.0	18.5	
P324	5 IK	円形	36.0 × 36.0	28.0		P394	7 IK	長方形	40.0 × 39.0	9.0	
P325	5 IK	円形	27.0 × 27.0	25.0		P395	7 IK	円形	30.0 × 30.0	28.0	
P326	5 IK	楕円形	37.0 × 25.0	21.0		P396	7 IK	円形	40.0 × 38.0	13.0	
P327	5 IK	円形	22.0 × 19.0	34.0		P397	7 IK	円形	33.0 × 31.0	43.0	
P328	5 IK	不正規円形	33.0 × 23.0	18.0		P398	7 IK	円形	23.0 × 21.0	30.0	
P329	5 IK	長方形	(33.0) × 17.0	19.0	近現代	P399	7 IK	円形	22.0 × 21.0	12.0	
P330	5 IK	円形	20.0 × 19.0	40.0		P400	7 IK	円形	23.0 × 22.0	33.0	
P331	5 IK	円内円形	35.0 × 31.0	34.0		P401	7 IK	円形	45.0 × 36.0	31.5	柱根痕
P332	5 IK	円形	21.0 × 20.0	23.0		P402	7 IK	円形	35.0 × (32.0)	33.0	
P333	5 IK	円形	29.0 × 20.0	14.0		P403	7 IK	円形	16.0 × 13.0	14.0	
P334	5 IK	円形	26.0 × 25.0	20.0	柱根痕	P404	7 IK	円形	19.0 × 19.0	26.0	
P335	6 IK	円形	29.0 × 26.0	25.0		P405	7 IK	円形	50.0 × 46.0	40.0	
P336	6 IK	円形	37.0 × 36.0	49.0		P406	7 IK	円形	19.0 × 18.0	10.0	
P337	7 IK	円形	18.0 × 18.0	17.0		P407	7 IK	円形	26.0 × 25.0	32.0	
P338	7 IK	円形	17.0 × 16.0	10.0		P408	7 IK	円形	35.0 × 33.0	15.0	
P339	7 IK	楕円形	(40.0) × 30.0	18.5		P409	7 IK	円形	34.0 × (23.0)	10.0	
P340	7 IK	楕円形	26.0 × 15.0	13.0		P410	7 IK	円形	21.0 × 20.0	20.0	
P341	7 IK	円形	34.0 × 31.0	36.0	柱根痕	P411	7 IK	円形	51.0 × 51.0	19.0	
P342	7 IK	円形	18.0 × 18.0	8.0		P412	7 IK	円形	30.0 × 30.0	11.5	
P343	7 IK	円形	26.0 × 25.0	35.0		P413	7 IK	楕円形	27.0 × 22.0	11.0	
P344	7 IK	円形	27.0 × 26.0	24.0		P414	7 IK	不正規円形	(104.0) × 26.0	13.0	
P345	7 IK	円形	26.0 × 19.0	14.0		P415	7 IK	不正規円形	72.0 × 40.0	16.0	
P346	7 IK	円形	23.0 × 22.0	10.0		P416	7 IK	円形	33.0 × 33.0	10.5	
P347	7 IK	円形	25.0 × 24.0	11.0		P417	7 IK	不正規円形	(47.0) × 20.0	14.0	
P348	7 IK	円形	23.0 × 20.0	5.0		P418	7 IK	不正規円形	89.0 × 29.0	17.0	
P349	7 IK	円形	22.0 × 22.0	36.0		P419	7 IK	円形	22.0 × 22.0	9.0	
P350	7 IK	円形	30.0 × 30.0	39.0		P420	7 IK	楕円形	65.0 × 20.0	36.0	
P351	7 IK	円形	21.0 × 21.0	8.0		P421	7 IK	不正規円形	122.0 × 55.0	11.0	
P352	7 IK	円形	20.0 × 19.0	19.0		P422	7 IK	不正規円形	78.0 × 51.0	37.0	
P353	7 IK	円形	32.0 × 27.0	22.0		P423	7 IK	円形	30.0 × 30.0	40.0	
P354	7 IK	円形	27.0 × 26.0	30.0		P424	7 IK	円形	27.0 × 23.0	28.0	
P355	7 IK	円形	36.0 × 34.0	23.0		P425	7 IK	円形	31.0 × 30.0	13.0	
P356	7 IK	円形	34.0 × 31.0	38.5	柱根痕	P426	7 IK	楕円形	(44.0) × 39.0	18.0	
P357	7 IK	円形	27.0 × 26.0	19.0		P427	7 IK	楕円形	23.0 × 17.0	10.0	
P358	7 IK	円形	32.0 × 31.0	48.5	柱根痕	P428	7 IK	楕円形	45.0 × 32.0	22.0	
P359	7 IK	円形	29.0 × 27.0	33.3	柱根痕	P429	7 IK	円形	16.0 × 14.0	7.0	
P360	7 IK	円形	26.0 × 23.0	19.0		P430	7 IK	円形	21.0 × 18.0	8.0	
P361	7 IK	円形	35.0 × 34.0	31.0		P431	7 IK	円形	31.0 × 27.0	20.0	
P362	7 IK	円形	36.0 × 28.0	19.0		P432	7 IK	楕円形	28.0 × 17.0	11.0	
P363	7 IK	円形	28.0 × 25.0	25.0		P433	7 IK	楕円形	49.0 × 41.0	16.0	
P364	7 IK	楕円形	59.0 × 40.0	33.0		P434	7 IK	円形	22.0 × 22.0	7.0	
P365	7 IK	円形	45.0 × 40.0	18.5		P435	7 IK	円形	29.0 × 27.0	17.0	
P366	7 IK	円形	41.0 × 40.0	21.0		P436	7 IK	楕円形	48.0 × 35.0	8.0	
P367	7 IK	円形	43.0 × (23.0)	49.0	柱根痕	P437	7 IK	円形	26.0 × 26.0	6.0	
P368	7 IK	円形	33.0 × 29.0	14.0							
P369	7 IK	円形	26.0 × 24.0	21.0							
P370	7 IK	楕円形	41.0 × 38.0	33.0							
P371	7 IK	楕円形	40.0 × 30.0	16.0							
P372	7 IK	楕円形	(25.0) × (11.0)	25.0							
P373	7 IK	円形	38.0 × 34.0	14.0							
P374	7 IK	楕円形	79.0 × 41.0	25.5							
P375	7 IK	円形	26.0 × 25.0	6.0							
P376	7 IK	円形	36.0 × 29.0	40.0	柱根痕						
P377	7 IK	円形	(27.0) × (22.0)	31.0							
P378	7 IK	円形	38.0 × 37.0	78.5							
P379	7 IK	楕円形	62.0 × 52.0	99.0							
P380	7 IK	楕円形	(68.0) × 64.0	27.5							
P381	7 IK	円形	35.0 × 28.0	29.0							
P382	7 IK	円形	21.0 × 17.0	27.0							
P383	7 IK	円形	20.0 × 20.0	10.0							
P384	7 IK	円形	28.0 × 26.0	23.0							
P385	7 IK	円形	36.0 × 30.0	26.0							
P386	7 IK	円形	26.0 × 24.0	20.0							
P387	7 IK	(楕円形)	25.0 × (18.0)	16.0							
P388	7 IK	楕円形	42.0 × 35.0	9.0							

5) 道構外出土遺物 (第20図3・6・9・12 P L18)

調査区内からは道構に伴わない中世の遺物が僅かながら出土している。第20図3・6は土師質土器小皿であり、いずれもロクロ成形で製作され、3の底面には回転糸切り痕が残る。9は渥美産陶器の鉢類の胴部破片で、調査区内から表採されたものである。本資料はロクロ成形されたもので、内面に薄く釉が見られる。同一個体と考えられる小破片（未掲載）が第1号溝跡から出土している。12は常滑産陶器の壺甌類の底部近くの胴部破片で、下半部に回転ヘラ削りの痕跡が残る。本資料は確認調査時に第6号トレンチの北端近くから出土したものである。

第4章 総 括

今回発掘調査を実施した中高津西原遺跡は、遺跡として周知されている範囲のうち中央から南側にかけての道路建設予定地と3棟の住宅建設部分である。したがって、当初の遺跡全体の1／5程度であり、当遺跡に関する情報は断片的にならざる得ないが、少なくとも発掘調査は今回がはじめてあり、貴重な考古学的情報を提供することとなった。ここで部分的とはいえ調査で検出した時期ごとの成果を概観し、特徴的な遺構および遺物について簡単にまとめておきたい。

1 旧石器時代・縄文時代

遺構は明確ではないものの、旧石器時代と縄文時代の遺物が検出された。まず旧石器時代では、調査区南東側から頁岩製の基部調整ナイフ形石器1点が単独出土している。縦長剥片（石刃）を素材とし、基部加工を施したもので、ほぼ完存品の長さ5.79cmを測る優品である。出土地点は台地平坦面であるが、周囲の拡張調査では石器集中地点等関連する遺構・遺物の検出は確認できなかった。出土層位は第5層黄橙色硬質ローム層最上面付近で、いわゆる武藏野台地における第1黒色帯下部と判断され、姶良・丹沢降下火山灰（AT）を含む層に相当するといわれているものの、層中においてATは確認できなかった。他の組成石器も検出できず、石器1点の出土で編年的な位置付けは危険であるが、第5層最上部という出土地点と基部調整を特徴とするナイフ形石器は、茨城編年によるナイフ形石器の新段階に相当する「Ⅱb期」に比定されよう（橋本2002）。なお、ここでは少なくとも石器製作は行われておらず、製品だけが単独でこの地に撒入されたものであろう。

また僅かであるが、縄文土器の出土がある。遺構は伴わず古墳時代の住居跡覆土中あるいは表土層で検出したものである。そのなかで外面が縄文で、内面が条痕文の施された土器が1点出土した。小破片のため全体の形状については窺い知ることはできないが、胎土に多量の纖維を含み、微隆起帯が区画文となり、無節縄文が地文である。外面は前期的、内面は早期的様相を呈するもので、早期最終末土器群（齊藤2006）とされ、「日向南B式」に並行するものに比定されている（吹野1994）。そのほか前期後半諸磽式・浮島式段階の土器群、前期終末土器群が出土している。さらに中期中葉の阿玉台式は陣帶に沿って有節沈線文が施文された阿玉台1b式である。また中期後半の土器片錐が1点出土している。楕円形を呈し、周縁を打欠き表面線辺のみを研磨している。加曾利E1式土器の破片を再利用したものである。

2 古墳時代

遺構として竪穴住居跡4軒を検出した。時期的にはほぼ同一時期で、古墳時代中期に比定される。それぞれ重複するものではなく、広い範囲に散在しており、また確認調査結果を合わせみると、少なくとも集落の展開は北側の谷津にむかって広がり、逆に南側は今回の調査区が限界のように判断できる。なお、調査の関係で各住居跡は完掘できたものではなく、いずれも部分的に保存区域に掛かっており、第2号住居跡（SI02）を除く3軒は確認された住居の半分以上が未調査部分となってしまった。したがって3軒については遺構の状況を含め、詳細について不明な点が多くなってしまった。

a) 第2号住居跡の構造について

さて、こうした状況のもと調査区北西隅で検出された火災住居である第2号住居跡は北と南の二隅が保存区域に掛かっているものの、ほぼ全体が把握可能な唯一の住居跡である。しかも遺存状態が非常に良好で、床面に残された付帯施設はほとんど検出することができた。まず規模は一辺7.2mのやや大型の方形プランをもち、主軸が西側に大きく傾いている。そして炉をはじめとする付帯施設はすべて備えられていた。すなわち、主柱穴や支柱穴、入口部施設である梯子穴のほか、貯蔵穴、さらに壁溝や間仕切溝である。いずれも中途半端な掘り方を示すものではなく、ほぼ完璧な状態で構築されていた。とくに注意したいのは平面形と主柱穴の配置が正確に計算されて構築されていることである（第34図）。これは遺構の性格上玉作工房という特殊な建物であることに要因するものと推定される。そこで平面形の概要について触れておきたい。まず設定にあたり住居の中心点を決定する。これから北西方向を主軸線とする7.2mの直交する東西中軸線、南北中軸線を引く。さらに中心点を通る45°の対角線から四隅を区画する。あいにく南北隅は未確認であるが、東西隅はそれぞれ中心点から4.8mとなり、おそらく南北隅も4.8m前後を測るであろう。主柱穴はその対角線上で中心点から2.8mの位置にあり、しかも各柱間は4mを確保する。これで基本設計が決定される。また入口部施設と推定した南東壁際中央の柱穴は中軸線上ではなく、わずかに南側に寄っている。そして炉も西壁際に近い位置に設置されているがやはり中軸線より南側である。貯蔵穴の配置などにより作業場空間確保のため中軸線から外しているのかも知れないがあくまでも推測の域を出ない。

また炉の掘り方は浅く、新旧2基の炉跡が確認された。旧炉跡は中央寄りの小振りに造られていたが、新时期は主軸線上の西方へ移動して造り替えられもので、規模も旧炉跡の2倍以上の大きさを有する。住居の建築替えや拡張等がみられないことから炉のみ規模を大きくし、西側へ移動させたことになる。

柱穴は主柱穴4本、梯子穴1本、支柱穴である補助柱穴3本の計8本が検出できた（第34図）。主柱穴の配置は既に触れたとおりであるが、その掘り方は円形で径は30~40cm、深さ90~100cmと4本ともしっかりと掘削されている。しかし、柱痕については明確に捉えることができなかった。それは火災住居であることから柱が抜き取られた可能性が高いと推定されるからである。また主柱穴に添うように支柱穴が存在する。北主柱穴側は未調査域のため明瞭ではないが、他の3本は主柱穴から50cm前後離れた規模の小さな柱穴であり、確実に主柱穴の補助的な役割を呈した脇柱穴である。しかし、その配列がばらばらである。西主柱穴では南側に壁面に平行するように穿ち、深さ9cm。東主柱穴では対角線上の外側に設定され、深さ18.7cm。南主柱穴では対角線上に平行して東側に設置され、さらに柱が抜き取りされている。深さ23.0cmである。こうした位置のずれについては間仕切溝との関わり、すなわち玉作に伴う作業空間確保のためと理解している。

さらに主要施設のひとつである貯蔵穴が3基確認された。西壁際に2基、南隅に1基である。ここでは貯蔵穴といっても玉作作業に伴う工作用ピットの存在を考慮しなければならない。まず西壁際の2基はわずか75cmしか離れておらず同時存在のピットである。いずれも略円形を呈し、掘り方はしっかりしている。壁溝や間仕切溝を切って設置されていることから貼床面構築後に掘削されたものであろう。両ピットからは整形土器を含む土器がまとめて出土している。また南隅ピットでは検出面は一部であるものの、土器の出土はなく、わずか1片であるが滑石製の碎片が出土されており、玉類工作用ピットであった可能性を指摘できる。いずれもピット上面に蓋等が用いられていたかは不明であるものの、これらピットは機能別に使い分けられていたものと推定される。

b) 遺物について

第2号住居跡出土土器の総体的な器種構成については、報文中で触れたとおり壺、鉢、塙、塊、高壺、壺、壺があり、それぞれ茨城県内における5世紀代の特徴をもっている。まず壺類はバラエティーに富んでおり、口縁部がわずかに外反するもの、ほぼ垂直気味に立ち上がるもの、さらにわずかに内湾するもので、底部はいずれも平底である。なかでも口縁部がほぼ垂直に立ち上がる壺は外面に赤彩が丁寧に施されている優品である。塙は体部が扁球形を呈し、口縁部が直線的に外傾するもので、器厚は厚くつくりはやや粗雑である。またこの時期の最も特徴的な高壺は図示したものだけで10点を数え、うち1点はほぼ完存品である。壺部と脚部に特徴があり、まず壺部の下位に弱いが稜を有し、口縁部が内湾するものと外反するものがある。また脚部は「ハ」の字状に開き、いわゆるエンタシス状に開くものは出土していない。壺は口縁部破片が出土している。有段の口縁部は退化する段階であるが、比較的よく有段を残している小型の壺である。これら出土遺物は茨城県内において、櫻村編年（櫻村1996）のⅡ段階に比定してよいであろう。同じように第4号住居跡では壺、塙、高壺が出土している。壺をはじめ、塙・高壺もほぼ第2号住居跡出土と同一であるが、高壺3点出土のうち脚部が外見上前段階の中実柱状に酷似した円筒状の脚部がある。櫻村氏が指摘しているとおり、「脚部の開き方も様々でバラエティーに富んでいる」。

土器以外の遺物としていわゆる土玉が3点と管状土錘1点が出土している。土玉は球形土錘とも呼ばれ、いずれも漁網錘の一種と判断されている。しかし、1点のみ径2cm強で、重さ8.6gを測る小型の土玉がある。しかも貫通孔は通常一方向の1孔のみであるが、ここでは3方向、正確には4方向の穿孔行為がみられる土玉である。つまり正面からみて直交する十文字の2方向から貫通させ、さらに正面中央と裏面中央の2方向から穿孔させたもので、正面からの穿孔は先の2方向の貫通孔と連がり、裏面からは途中でやめている。仕上げも丁寧であるが、粗ざれ痕等は確認できない。かつて径が1.5~2cm前後で、重量10g以下の土玉は漁網錘用ではなく、祭祀用（装飾用ではない）のものではないかとしたことがある（小川2007）。赤彩は施されていないが、祭祀用など漁網錘以外の用途を考えたい。

さらに住居跡東隅の径30cmの範囲内で滑石製の剥片、碎片がまとまって出土した。滑石製品製作の際に残された残屑である。南隅の工作用ピット（貯蔵穴3）でも碎片が2点出土しており、これらをもって本跡を玉作工房跡と判断した。入口部の左右が敲打工程を行う作業空間と理解したい。しかし、砥石をはじめとする玉作工具の出土が全くなく、住居全体の空間利用域を確認することができなかった。あるいは最終工程である研磨作業等砥石を使用する場は別な住居跡の可能性もある。なお、隣接する第3号住居跡（SI03）の覆土中から一部欠損した双孔円板が出土しており、明らかに関連遺構である。

3 中世

中世と判断できるものとして、溝跡・土坑・柱穴状遺構がある。溝跡は確認調査の段階でも本遺跡の中心的な遺構であることが判明していた。つまり遺跡北西端から中央部を貫けて南東端までちょうどその長さは約100m強である。さらに周知遺跡の範囲を超えて台地縁辺部方向に延びていくことが想定され、長さ120~130mほどの区画溝と推定される。北側の台地縁辺部を開口する弧状もしくは環状区画を呈するものと推定されるが、今回の調査では半円を呈する段階で調査を終了しているため、全体の区画を把握ができなかった。

なお調査は3地点、延べ距離にしてわずか24mである。しかも半分は部分調査であり、結果的に大部分の溝は保存されたことになる。それでも溝の構築時期や形状については大まかに捉えることができた。特に注目したいのは、3区とした南西側で明らかになった部分である。東側で近代以降の芋穴によって一部壊され

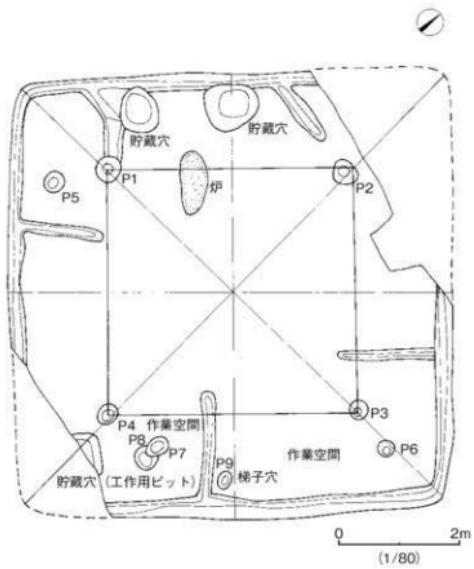
ているものの、遺存状態は良好である。まず中位面の中央で帯状の硬化面が検出された。最大幅50cmを測り、厚さ1cm前後の叩き面が検出され、道路跡であることが判明した。この底面からはマシミの一塊が出土した。殻幅3.5cmを最大に、2cm前後に集中していた。桜川低地から採取したもので、食料とした後、残滓として投棄された状況が読み取れる。さらにこれら硬化面部を剥がし、溝本来の底面を検出した段階で、箱蓋研の溝であることが判明した。当溝の全体像は明確ではないが、明らかに区画溝である。構築時期は覆土中より検出された遺物より判断可能である。出土した遺物は、いずれも小破片である。器形全体を窺い知るものはないものの土師器、在地系の土師質土器、白磁、渥美産陶器などと少数であっても内容的に充実している。まず土師器はいわゆる内黒処理が施された高台付坏である。年代的に時代が下る段階との指摘もあるが、少なくとも10世紀後半に比定されるであろう。また在地系の土師質土器はいずれも小皿類で、カワラケと呼ばれている部類である。ロクロ成形で、底部は糸切り痕が残置されているものが4点確認されている。また白磁は底部破片のみであるが優品であり、さらに渥美産陶器は鉢・壺類が出土している。これらは土師器を除き12~13世紀代に比定される。

また区画溝の形状は明確ではないが、区内には土坑および複数の掘立柱建物跡と推定される柱穴状遺構(ピット)群が検出されている。しかし、いずれも遺物の出土はなく時期を決定できないでいるが、覆土の状況から土坑については明らかに繋りがない近世以降のいわゆる芋穴を除けば中世段階と判断してよいであろう。規模の小さなものが多いことから貯蔵施設や墓壙としての機能を果たしていた可能性が高い。また柱穴状遺構(ピット)群については、柱底面に柱根(あたり)痕の確認できるものがあり、これらは中世の建物跡と推定してよいであろう。しかし、間尺のあう明確な建物跡は検出できなかった。いずれにしても少なからず貿易陶器を含む遺物の出土は、区画溝で囲まれた比較的富裕な階層の屋敷跡もしくは集落跡であったことが推定される。

(小川和博)

参考文献

- 1992 古墳時代研究班「茨城県における古墳時代中期の遺跡について」『研究ノート2号』財团法人茨城県教育財團
1994 吹野富美夫「茨城県における縄文時代早期終末から前期初頭土器群について」『研究ノート3号』財团法人茨城県教育財團
1997 櫻村宣行「和泉式土器編年考－茨城県を中心として」『研究ノート5号』財团法人茨城県教育財團
1999 櫻村宣行・土生朗治・白石真里「茨城県における5世紀の動向」東国土器研究5号
2002 橋本勝雄編「茨城県における旧石器時代研究の到達点－その現状と課題－」茨城県考古学協会
2005 埋蔵文化財研究会「古墳時代の滑石製品－その生産と消費－」
2006 斎藤弘道「茨城の縄文土器」 茨城県立歴史館史料叢書9 茨城県立歴史館史料部
2007 小川和博「城内遺跡発掘調査報告書」守谷市教育委員会



第34図 第2号住居跡の構造

報 告 書 抄 錄

ふりがな	なかたかつにしはらいせき					
書名	中高津西原遺跡					
調書名	建壳分譲事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
卷次						
シリーズ名						
編著者名	小川和博 関口 満					
編集機関	中高津西原遺跡調査会					
所在地	〒300-0811 In029 (826) 7111 茨城県土浦市上高津1843番地 上高津貝塚ふるさと歴史の広場内					
発行機関	土浦市教育委員会					
発行年月日	西暦2007年(平成19年)8月31日					
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	緯度 北緯	経度 東経	調査期間 2006 (平成18)年 9月5日～ 10月17日
なかたかつにしはらいせき 中高津西原遺跡	土浦市中高津 二丁目 849-3	08203	098	36度 4分 09秒	140度 11分 18秒	約920m ² 建壳分譲事業 に伴う事前調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項
中高津西原遺跡	集落跡	古墳時代 中世	堅穴住居跡4軒 溝跡1条、土坑27基、柱穴状遺構437基など	土師器、石製品 土師質土器、陶器(渥美産、常滑産)、白磁、貝	古墳時代中期の堅穴住居跡で構成される集落跡が確認された。堅穴住居跡から石製模造品や未製品が出土している。 中世の遺構として、鎌倉時代の溝跡が弧を描くように見られ、その内側のエリアに柱穴状遺構群などが検出された。	
要約	<p>本遺跡の主要な時代は古墳時代と中世である。古墳時代の遺構としては堅穴住居跡が4軒確認され、いずれも出土遺物から中期（5世紀代）のものと考えられる。今回確認された堅穴住居跡群は、確認調査状況も加味して考えると集落跡の縁辺部分にあたることが理解できる。この集落跡の中心は本来開発エリアの北側の土地にあると考えられる。今回調査された堅穴住居跡では石製模造品やその未製品などが検出され、玉作工房跡の可能性が考えられる。当地域におけるこの時期の出土遺物の特徴を良く示している。</p> <p>中世の遺構として最も特徴的なものは、部分的ではあるが開発エリア内に弧を描いて確認された第1号溝跡である。この溝跡の北側からは柱穴状遺構群などが確認され、全体像や性格は不明ながら溝で区画された建物群の存在が想定される。溝跡の出土遺物は少ないながら土師質土器小皿や渥美産陶器壺蓋類、そして白磁碗類がある。また、自然遺物としてマジミの貝殻が塊で出土しており、これらの施設を構築した人々の生活残滓と考えられる。これらの遺物は鎌倉時代でも12世紀から13世紀代に比定される。</p>					

写 真 図 版

遺跡近景



遺跡近景



調査区全景



PL2



旧石器時代試掘調査区（PG1）



旧石器時代遺物出土状況（PG3）



ナイフ形石器出土状況（1）



ナイフ形石器出土状況（2）

第1号住居跡



第1号住居跡土層



第1号住居跡貯藏穴



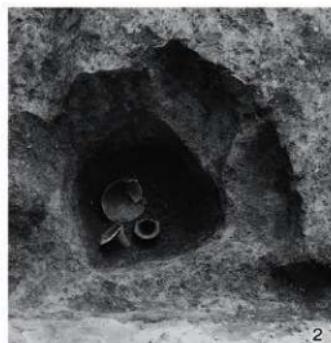
PL4



第2号住居跡



第2号住居跡遺物出土状況



第2住居跡
貯藏穴遺物出土
状況

- 1 貯藏穴1
- 2 貯藏穴2

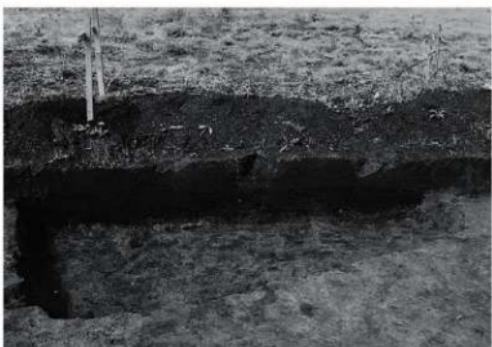
第3号住居跡



第4号住居跡遺物出土状況



第4号住居跡土層



PL6



第1号溝跡（1区）



第1号溝跡（1区）



第1号溝跡（3区）

第1号溝跡（3区）硬化面



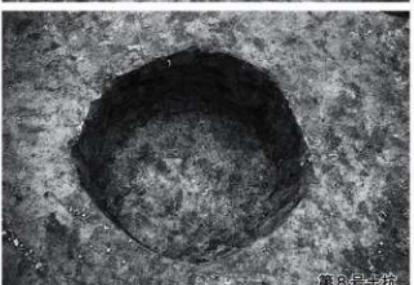
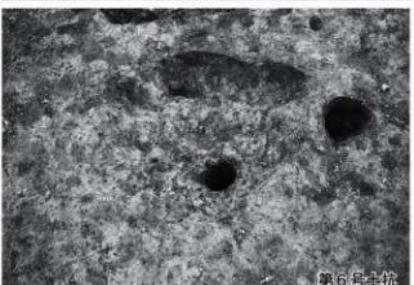
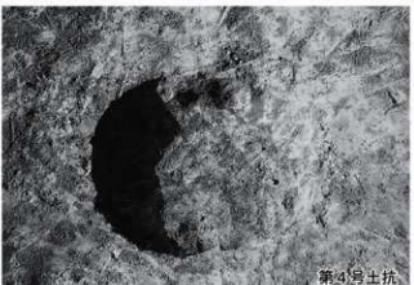
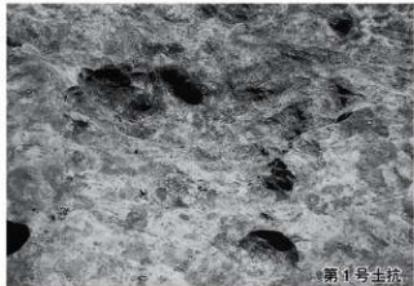
第1号溝跡（4区）



第1号溝跡（1区）土層



PL8





- 1 第9号土抗
- 2 第10号土抗
- 3 第11号土抗
- 4 第12号土抗
- 5 第13号土抗



- 1 第14号土抗
2 第15号土抗
3 第16号土抗
4 第17号土抗
5 第18~20号土抗

1区全景



2区全景



3区全景



PL12

3区全景



4区全景



5区全景



5区全景



6区全景



7区全景

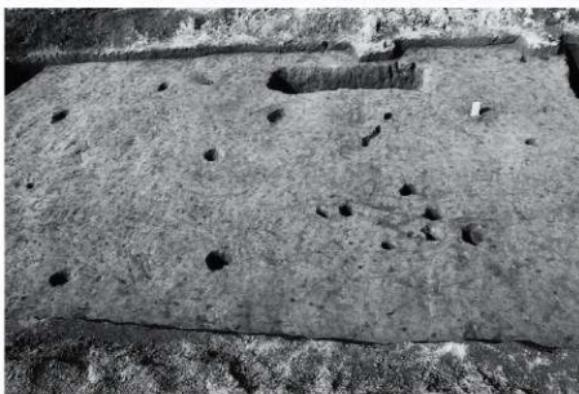


PL14

柱穴状遺構群（2区）



柱穴状遺構群（3区）



4区全景





SI02-1



SI02-3



SI02-5



SI02-6



SI02-11



SI02-13



SI02-15



SI02-16

第2号住居跡出土遺物



SI02-17



SI02-18



SI02-21



SI02-24



SI02-25



SI02-27



SI04-3



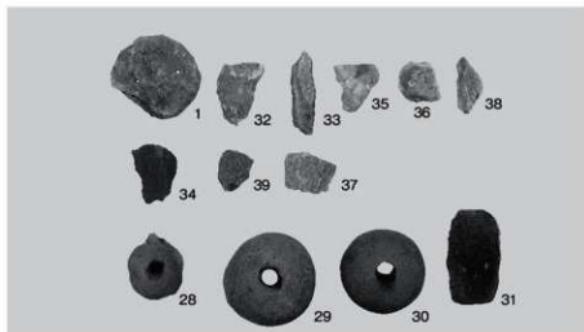
SI04-4

第2·4号住居跡出土遺物

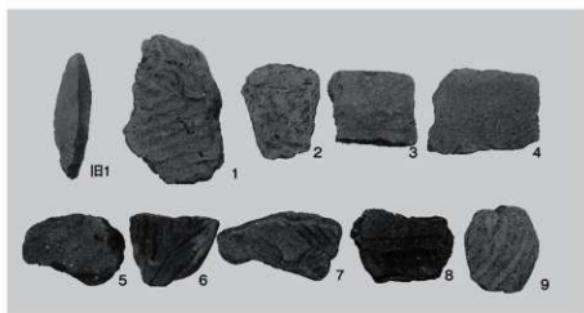
第2・3号住居跡出土遺物

SI02 (28~39)

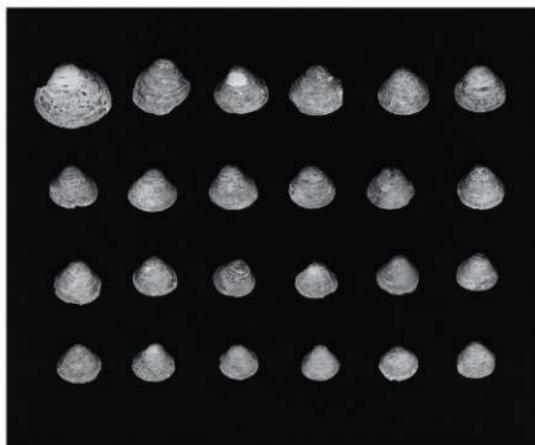
SI03 (1)

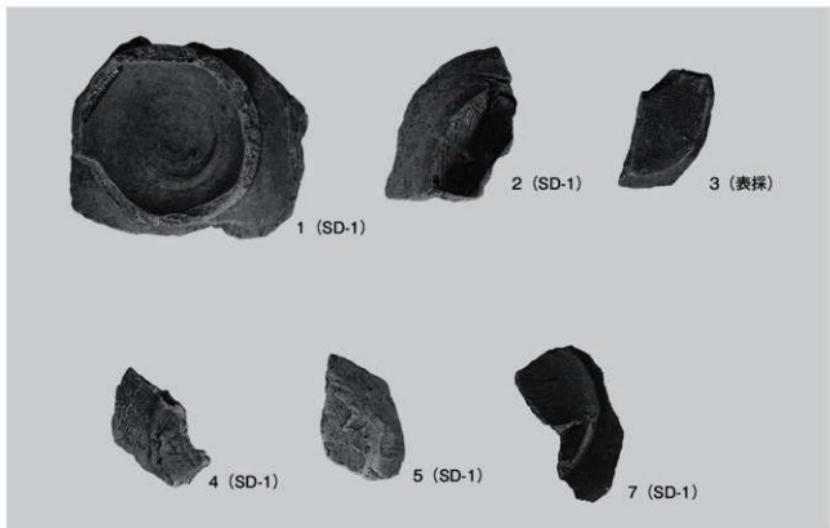


旧石器時代・縄文時代出土遺物

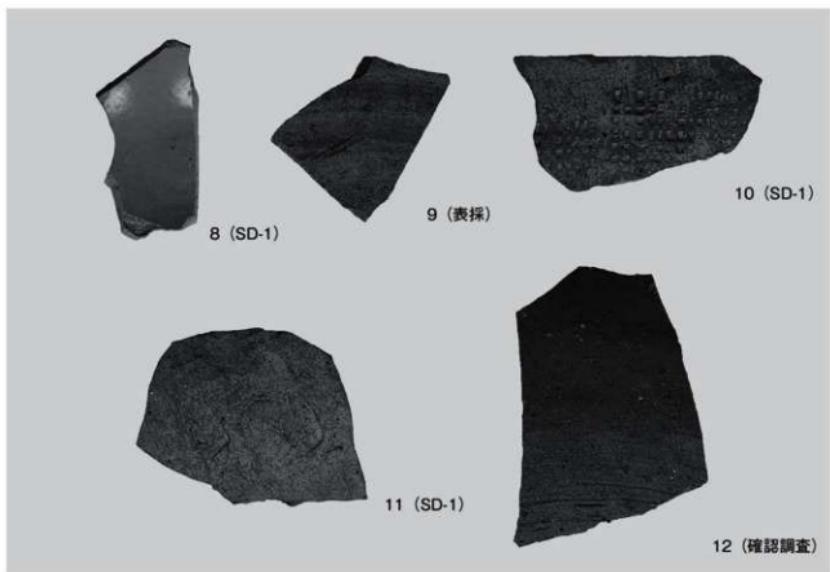


第1号溝跡出土貝類





第1号溝跡ほか出土遺物 (1)



第1号溝跡ほか出土遺物 (2)

中高津西原遺跡

建売分譲事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日 2007年8月31日
編集 中高津西原遺跡調査会
発行 土浦市教育委員会
問合せ先 上高津貝塚ふるさと歴史の広場
〒300-0811 茨城県土浦市上高津1843
TEL 029(826)7111
印刷 (株)あけぼの印刷社